

源氏物語の語法・用語例

―慣用語句(一)―

橘 誠

一

「源氏物語事典」(池田亀鑑編)の「あふぎ」の項には、「扇 三十三例。『御あふぎ』二例。檜扇と蝙蝠の二種類が用いられている。……」とし、それぞれについて、一頁三段のうちの一段余りにわたる長い説明がついている。しかし、この詳しい解説を熟読しても、それだけでは、源氏物語の次の文の、傍線をつけた部分の用語例の意味はわからない。

- 1 中君「秋はつる野辺の気色も篠すゝきほのめく風につけてこそ知れ我(が)身一つの」とて、なみだぐまるゝが、さすがに恥づかしければ、扇を紛らはしておはするを、心のうちの、らうたく推し量らるれど、「かゝるにこそ、人も、え思ひ放たざらめ」と、うたがはしきが、たゞならで、恨めしきなめり。宿木 五 103
- 2 ほたるを、うすきかた(びら)に、この夕つ方、いと多く包みおきて、ひかりを包みかくし給へりけるを、さりげなく、とかくひきつくるふやうにて。にはかに、かく掲焉に光れるに、浅ましくて、扇をさし隠し給へるかたはらめ、いとをかしげなり。螢 二 425
- 3 なつかしきほどの直衣に、色こまやかなる御衣の、うち目、いと、けうらに透きて、影よわりたる夕日の、さすがに、何心もなうさしきたるに、まばゆげに、わざとなく、扇をさし、かくし給へる手つき、「女こそ、かうはあらまほしけれ。それだに、えあらぬを」と、みたてまつる。夕霧 四 137

4 「怪し」と思ひて、扇をさし隠して、見返(り)たる様、いとをか
し。東屋 五 165

5 「いかゞ思ふらん」と、さすがに過ぐしがたくて、裳の裾をひき、驚かし給へば、かはほりの、えならず絵かきたるを、さし隠して、見かへりたるまみ、いたう見延べたれど、目皮いたく黒み落ちいりて、いみじく、はづれそゝけたり。紅葉賀 一 290

6 扇を、つと、さし隠したれば、顔は見えぬ程、心もとなくて、胸うちつぶれつゝ見給ふ。宿木 五 121

これらの諸例は、「紛らはす」「隠す」「さし隠す」などが他動詞であるから、文法どおりに読み解いて行けば、「扇」なり、「かはほり」なりが目的語になって、「扇を隠す」「かはほりを隠す」ことのように読み取れる。ところが、実際はそうではない。源氏物語の用語例によれば、扇をさし上げて、人から見られないように顔を隠すこと、つまり、「扇で顔を隠す」ことをいう慣用になっている。文法一筋縄ではないかない、古典読解のむずかしさがここににある。そこで、文法の知識のほかに、慣用語句の理解が必要になるわけである。源氏物語には、いわゆる慣用語といわれるものはそんなに多くはないけれども、それに準ずべきものは、かなり多い。

次に、これらについて小考を試みたい。引用する源氏物語の原文は、岩波書店発行の「日本古典文学大系14・18」―「源氏物語 一・五」(山岸

徳平校注) —の本文(以下「大系」と略称する)による。該書の漢字を当用漢字に直したこと、引用紙面節約のために、会話部分をも思惟内容と同じく別行にしかかったこと、及び、特別な場合以外は漢字のルビをとったこと、この三つ以外は、原文どおりである。わずらわしいまでに多い、親切な句読点も、そのままにした。漢数字は巻数、算用数字は頁を表わす。

3の「扇をさし、かくし給へる」の読点は、次のような、源氏物語の用語例に従って、2・4・6のように、「扇をさしかくし給へる」とする方がよいのではあるまいか。すなわち、

7 句「人も見ず。まろ、顔かくさん。なほく」とて、御袖してさしかくし給へば、いと、いつくしうて、ゐてたてまつり給ふ。

横笛 四 69

8 又、「むかひて見るかひなからんも、いとほしげなり、かくて、年経給ひにけれど、殿の、今に、さやうなる御かたち・御心と見たまうて、浜木綿ばかりのへだて、さしかくしつゝ、なにくれと、もてなしまぎらはし給ふめるも、むべなりけり」と、思ふ心のうちぞ、恥づかしかりける。

乙女 二 314

9 薫「あまたの年頃、……いと、埋れたりや」と、強ひて、かき起し給へば、をかしき程に、さし隠して、つゝましげに見出したるまみなどは、いと、よく、思ひ出でらるれど、

東屋 五 194

などでわかるように、袖や几帳や扇で顔を隠すことを、単に「さし隠す」と言うだけでも通ったのである。扇や蝙蝠の場合は、手でかざして顔をかくすのであるが、几帳の場合もあるらしいので、「さす」は、接頭語、乃至は複合動詞の一部ととるのがよいのではあるまいか。どうも、「かざす」の意の独立動詞としての用法ではなさそうである。

「扇を隠す」型の慣用語に対して、7の文の波線部分のように、「顔を隠す」型の表現もないではない。

10 「いらへさせたてまつらん」とて、かの御ことをかけ給へば、顔は

隠し給へる御袖を、すこし引きなほして、
11 御殿油を近うかゝげて、見たてまつり給ふに、隠し給ふ顔も、たゞ寝給へるやうにて、変り給へる所もなく、
12 物おぼえずなりにたるさまなれど、顔をば、いとよく隠し給へり。

総角 四 462

「顔を隠す」ことは、当時の女性の身だしなみなのであった。従って、

顔ひき入る 帚木 93 乙女 298 螢 433 顔をひき入る 乙女 299 螢 433

手習 344 夢浮橋 435

顔引き隠す 賢木 411 顔をもて隠す 真木柱 145 幻 208

顔をふたぐ 総角 455

などのように、これに関する表現がかなり見られる。「顔ひき入る」「顔をひき入る」の「引き入る」は、共に下二段活用で、袖や夜具の中に顔を入れて隠すことである。「顔をふたぐ」の「ふたぐ」は、四段活用で、袖で顔を隠すことで、女性が男性に対して羞恥心を表わす動作である。

二

「文章辞典」(白石太二編)には、「慣用語」の使い方を次の七種類に分け、「成句・慣用語」といわれているものは、次のうちの(3)の意味のことであると述べてある。⁽¹⁾

(1)その社会や方面でよく使うことば、言い回し。

(2)書簡文などで、きまりきってかくべつの意味もなく使うことば。きまり文句。「前略」「陽春の候」「一筆申し上げます。」「早いもので、

あの時から、もう三年にもなります。」「など、その例である。

(3)二つ以上の語がいつも続けて使われ、全体で別のあるきまつた意味を表わすもの。「成句」などに近い、「ひゆ」のこともある。

(4)一般的な文法にはずれた言い方。

(5)そのいう文法。

(6)その国独特の表現・表現法。助詞の使い方、特に「は」と「が」との区別などは、日本語という国語に独特なものである。

(7)それぞれの国語。国語は、それぞれ独自の性格をもっているからであ

る。

又、「国語学辞典」(国語学会編)の「慣用句」の項(永野賢解説)でも、日本で慣用句というのは、二つ以上の単語がいつも一統きに、又は相応じて用いられ、その結合が全体として、ある固定した意味を表わすものをさす⁽²⁾と規定して、これに属するものとして、

(1)その構成要素の意味からだけでは、その句全体の意味が理解できないような表現、すなわち、もとの意味が拡張されまたは転用され、あるいは比喩的に用いられて固定した表現(例「道草を食う」「元も子もない」「油を売る」「腹が立つ」「あこで使う」「ピンからキリまで」「猫もしゃくしも」)

(2)その構成要素になる語がその語結合としてしか用いられないような表現(例「悦に入る」「埒があく」「間髪を入れず」)などがある。

(3)普通の文法や論理的な意味からは説明できないような表現(例「得せしむ」「無理からぬ」「負けずらい」)を慣用句と言うこともある。

の三種に分類し、これらの慣用句の成立には、

- (1)故事来歴の残存したもの(例「牛耳をとる」「薩摩守」)
- (2)古語の残存したもの(例「冠をまげる」「采配をふる」)
- (3)碁・将棋・スポーツなど特殊世界の用語に由来するもの(例「ダメを押す」「満を持す」)

- (4)比喩的なもの・気のきいた表現(例「腹を割る」「雀の涙」)
 - (5)意味を強める形(例「好き好んで」「いても立ってもいられない」)
 - (6)語路を整えた形(例「あいそもそも尽き果てる」「平氣の平左」)
- などをあげてある。

なお、慣用句は慣用語とも熟語とも言うが、慣用語には、

- (イ)きまり文句(例「ごめんなさい」「お供いたします」「本日は晴天なり」)
- (ロ)官庁用語・学術用語・文学用語・遊里語など限られた社会における通用語(例「原議書」「ラング」「秋の夕暮」「あがりっぱな」)
- (ハ)ある個人の常用愛用する語、などが含まれるし、熟語と言う時は、「春風」「人さし指」「行き暮れる」のようないわゆる複合語も含まれ

る。

とある。

最近の研究では、早く「日本語のイデオム」(昭和二十五年九月刊、三省堂「国語双書」)を著わして、この方面の研究に道を開いて来られた白石大二氏の「国語慣用語辞典」(昭和四四年八月刊)に、同氏の「解説慣用語論」が収められている⁽³⁾。

〔一〕言語の本質と慣用——擬声言語起源説の意味するもの、〔二〕言語表現の完成とひゆ、〔三〕擬声語の位相、〔四〕ひゆの段階——(一)ひゆの本質、(二)ひゆの実際、(三)ひゆのいろいろ、〔五〕ひゆのふるさと——(一)鶏をめぐって、(二)神話伝説に関して、(三)武器・武器をめぐって、(四)水をめぐって、(五)漢語のたとえ、(六)「来世」の表わし方について、(七)外来語をめぐって、〔六〕語句のしくみと転義——(一)語の意味変化とひゆ、(二)類義語とひゆ・成句、〔七〕慣用語とその分類

にわたって述べられた、堂々八〇頁の力作である。その巻末につけてある「構成要素別索引」の冒頭にも、慣用語の分類表が納めてある⁽⁴⁾。それは、

- (一) さしかた(指示・意味) (二) さすもの(指示物・出自・由来) (三) しくみ(言語形式上の構造)

の三つの観点から慣用語を分類し、二一行ずつ二段組みで、一頁たっぶり詰まっている、極めて詳細なものである。該論文では四種に分けている。

これらの分類に従って、源氏物語の語彙を一語一語検討して行ったら、「シェークスピア語彙」などにも劣らないような、すばらしい源氏物語の読解辞典が出来上がることであろう。到底そういう力量はないので、今回は、二、三の点から、源氏物語の語彙で、特に目立つ慣用語法を調べ、終わりに語法面の慣用語法について二、三触れたいと思う。

長々と、煩瑣なまでに慣用語・慣用語の定義について引用したのは、一応、現段階での慣用語(イデオム)に対する概念を確かめておかなければならなかったからである。なお、白石氏の「日本語のイデオム」では、巻頭の「慣用と慣用語」「慣用語句の限界」の条で、内・外の学者・文人の慣用語に関する諸説が紹介・検討されている。

「日本語のイディオム」に、一つの試みとして、現代日本語の慣用語について、言語上の性質を見る手始めとして、先ず意味を強めるためや語彙の上からいって、いつも対になって、二語がいつしよに用いられる、次のような慣用語があげてある。⁽⁵⁾

〔対になっていつしよに用いられる慣用語〕

猫も杓子も ばい押さえている。

間がなすぎがな ちよつとやそつと

ピンからキリまで ちよつとやそつとでできる

のるかそるか ことではない。

寄るとさわると 是が非でも

好き好んでやる みそもくそもない。

ためつすがめつ 根も葉もないこと（を言う）

ためつすがめつなめる。

ちよつとちよいと 根掘り葉掘り（聞く）

口も八丁手も八丁 手も足も出ない（頭があら

手八丁口八丁の男 ない）。

あの男は手八丁口八丁だ。 矢もたてもたまらない。

平氣の平左 身も世もないような思いをす

平氣の平左をきめこむ。 る（がする）。

（んでいる） あいそもこそも尽きはてる。

平氣の平左の顔をする。 はしにも棒にもかからない。

平氣の平左ですましてい このはしにも棒にもかから

る。 ない醜態。

おっかなびっくり 氣も心もてんとうする。

おっかなびっくりで力いっ 精も根も尽きはてる。

こつという言い方が、源氏物語ではどうなっているか当たってみよう。

源氏物語の文章は、周知のように対偶的な対句表現に富んでいる。故武田祐吉先生が、論文「源氏物語に於ける対偶意識」⁽⁶⁾で、源氏物語の作者が対偶意識をもっていたことを、

桐壺——帶木 宮中の淑景舎の異名——伏屋に生ふる帶木。宮廷と辺

鄙。木本と草本。同種であつて境遇の差違甚しきもの。

空蟬——夕顔 動物と植物。種類の別はあるが、其処に共通する物はかなげな情趣。

という、物語の巻名に、対偶的な名称を付すること、又、

この頃明暮御覽する長恨歌の御絵、亭子院の書かせ給ひて、伊勢、貫之に詠ませ給へる、大和言の葉をも、唐土の詩をも唯その筋をぞ枕言にせさせ給ふ。

のように、文章の上にも、対立的な表現技術を用いるのは、対偶的に事実を見て行こうとする心の表出であるとも言ひ得る、と説かれたのは、昭和も一桁の終わりごろであつた。確かに先生の仰せのとおりである。まずこの対立的なものから、源氏物語語彙での慣用語を拾ってみよう。

あふささるさ

13 狭き家のうちの主とすべき、人一人を思ひめぐらすに、たらはで悪しかるべき大事どもなん、かたぐ多かる。とすればかゝり、あふささるさにて、なのめに、さてもありぬべき人のすくなきを、

帯木 一 62

「あふささるさ」は、「逢ふさ離るさ」で、「逢う時と離れる時」の意という。そうすれば、「さ」は、「行くさ来さ」の「さ」と同じになる。古今集、俳諧歌、読人不知に、

そへにとて、とすれば、かかり。かくすれば、あな言ひ知らず。逢ふ

さきるさに（一〇六〇）

がある。結句の意味は、「逢ったり、離れたり」で、物事が食い違うために、一方が善ければ、片方が悪く、いわゆる「帯に短し、たすきに長し」の語のように、完全が望めないことにいう。「行き来」の原義は忘れられて、別の意味で用いられているので、慣用句になる。

いへばえに・（付、いへばおろかなり・いへば更なり）

14 人よりは、こよなう忍びおはす中納言の君、いへばえに悲しう思へるさまを、人知れず、あはれと思す。 須磨 二 15

「いへばえに」は、「言へばえ言へに」の略である。「いへ」は、四段活用動詞「言ふ」の已然形。「ば」は恒時条件を表わす接続助詞。「言う」と、いつでも、必ず」の意。「え」は、下に打消を伴う陳述の副詞。「に」は、古代の打消の助動詞で、「ず」の連用形に当たる。「いへばえに」で、「口に出して言おうとしても言えず」の意になる。伊勢物語 三段に、言へば、えに、言はねば、胸の騒がれて、心一つに嘆く頃かなという、在原業平の歌がある。

対立句法ではないが、「いへば……」という、同じような用法の語に、「いへばおろかなり」「いへば更なり」などがある。

15 海士「この風、今しばし、やまざらましかば、潮上りて、残る所なからまし。神の助け、おろそかならざりけり」といふを、きゝ給ふも、「いと心ほそし」と、いへばおろかなり。 明石 二 61

16 「何に、我さへ、さる言の葉を残しけむ」と、さまざま思し出づるに、やがて、絶え入り給ひぬ。「あいなく、いみじ」といへば、おろかなり。 夕霧 四 128

「いへばおろかなり」は、「言へば、疎なり」で、「おろか」は、物の程度がすすむ意の「かしこし」の対立語「疎か」である。「言ったところ

で、言いざまがおろそかである、一とおりである」の意で、言い尽くせないことをいう。

16 の大系の頭注の終わりに、「言うだけ愚な事である」と補ってあるのは、評者の愚昧をさすようにも聞こえるので、「愚」の字は変えた方がよいのではあるまいか。なお、16 の読点「いへば、おろかなり」の部分は、用語例に従って、15 のように、「いへばおろかなり」としたほうがよろしいのではないだろうか。

17 この春よりおはす御ぐし、尼そぎのほどにて、ゆらゆらとめでたく、つらつき・まみの薫れる程など、いへば更なり。 薄雲 二 220

18 うちにまゐり給ふ人の作法をまねびて、かの院よりも、御調度など運ばる。わたり給ふ儀式、いへば更なり。 若菜上 三 246

19 かがたのひとだまひ、上の御方の五（つ）、女御の五つ、明石の御あかれの三つ、目もあやに飾りたる装束・有様、いへば更なり。 若菜下 三 330

20 けかけたる金の筋よりも、墨つきの、うへに輝く様なども、いとなむ珍らかなりける。軸、表紙、箱のさまなど、言へば更なりかし。 鈴虫 四 78

21 弓ひき鳴らし、怪しき男どもの声どもして、宿直「火、あやふし」など、言ふも、いと、心あわたゞしければ、帰り給ふ程、いへば、更なり。 浮舟 五 271

「言へば、更なり」は、「言ったところで、事新しく、わざとらしい」ということから、「今更言うまでもない」「今更言う必要を認めない」の意に用いられている。ちなみに、21 の読点「いへば、更なり」は、語の構成はそのとおりであるけれども、成句としては、17、18、19、20 の場合と同じく、「いへば更なり」でよいのではなからうか。

「いへばおろかなり」と「いへば更なり」とは、語の構成要素の原義がまだ残っているので、いわゆる慣用語とするのは、無理であろう。

しどころもどろ

22 また、こゝの紙屋の色紙の、色あひ花やかなるに、みだれたる草の歌を、筆にまかせてみだれ書い給へるさま、見所限りなし。しどろもどろに愛敬づき、見まほしければ、さらに、残りどもに、目も見やられ給はず。 梅 枝 三 173

「しどろ」は、秩序なく乱れたさま、整わないさまをいう名詞。ナリ活用の形容動詞の語幹と見てもよい。「もどろ」は、同じ語路を整えるために添えた無意味の語である。二つ重なって、「しどろ」を強めていう語になる。源氏物語には、これがたった一つしか用語例がないが、この語を用いる対象に対して、「見所限りなし」「愛敬づき」「見まほし」というように、ほめことばを用いているのであるから、必ずしも現代用語のような悪い意味ばかりではあるまい。大系の頭注に「自由自在」とあるのが妥当であろう。「源氏物語辞典」(北山谿太著)の、「甚しくしどろなるさまにいふ語」では、説明不足であり、「甚だしく乱れたるさま」では、悪い意味にとるのが通念であろうから、考え物である。

見なれそなれて(付、見なれ見なれて)

24 たゞ、あだにうち見る人の、浅はかなる語らひだに、見なれそなれて、別るゝほどは、たゞならざるを、まして、もてひがめたる頭つき・心おきてこそ、頼もしげなけれど、……さるかたに、「これこそは、世を限るべき住みななれ」と、……にはかにゆき離れなんも心ほそし。 松 風 二 195

明石の尼君は、入道に愛想を尽かしてはいるが、今更に他へ行く気がしない。明石の浦こそは、最後の地と考えて、入道と共に暮す約束をして来たのに、入道から急に別れて上京する心細い心中を、尼が述べた場面である。「これこそは」の「これ」は、明石の浦をさしている。

「見なれそなれ」は、「水(見)馴れ磯馴れ」で、明石の浦の縁語「水馴れ」「磯馴れ」を用い、「見馴れ」に「水馴れ」を掛詞として用いたものである。「そなれ」は、もともと、「見なれ」と同じ語路を整えるため

の無意味な語であるが、ここでは、明石の浦であることから、それが縁語になっている。「逢いなれ親しんでいる」の意である。従って、意味の上からは、次の強意の疊語「見なれ見なれて」と同じである。「見なれそなれ」について、大系には、伊行釈と奥入とに、古歌として、水馴木の みなれそなれて 離れなば、恋しからじや。恋しからむやが引用してあることを補注している。

25 源「かう、この日頃、ありしより、けに、誰も／＼、まぎるゝかたなく、見なれ／＼て、えしも常にかゝらずば、恋しからじや。…堪へ難きこと多かりけれ」との給へば、いとど、みな泣きて、 葵 一 348

「見なれ／＼て……恋しからじや」が、伊行釈に引用してある古歌の二句と四句と類似している。二語が同意語であることを思わせる。

四

対立語又は同じ語路の語が対になって、二語がいっしょに用いられる慣用語句は、右のようなものだけである。しかし、いわゆる慣用語句でないものでも、源氏物語の語彙では、対偶式表現のものが極めて多い。少し横道にそれる憾みがあるが、それらを次にあげてみよう。

(一)名詞・代名詞の対立

明け暮れ(単独の副名詞は用例が極めて多いので、出所は省略する)
明け暮れにそへては 須磨11 明けくれにつけて 須磨50 霽標113
乙女300 明け暮れにつけても 胡蝶401 明け暮れの 若紫208 松風197
乙女303 薄雲218 222 若菜下359 鈴虫81 298 365 420 総角444 手習364 377
明け暮れも 早蕨11
朝夕に 賢木382 蓬生138 若菜上214 横笛55 夕霧141 匂宮220 橋姫
320 椎本363 総角399 朝夕にしも 夕顔126 朝夕の 桐壺5 40 葵344 353

藤裏葉 201 若菜下 332 360 匂宮 226 橋姫 332 椎本 355 早蕨 28 あした・
 夕 蜻蛉 281
 なげき明かし給へるあけぼの、ながめ暮らし給へる夕暮などの 幻 199
 朝日・ゆふ日を 蓬生 151
 あしき事・よき事を 夕霧 143
 遊び・戯れに(も) 若菜上 302 御法 170
 あだごとにも、まめ事にも 帚木 65
 あなた・こなた 若菜下 358
 御有様・心さま 橋姫 298 御有様・心ばへ 藤裏葉 200 有様も、人の
 程も 若菜下 387
 ありしさま・のたまひし心ばへ 早蕨 17
 生き・死にを 竹河 274
 出で入りはす 東屋 137
 古へ・今の御物語 若菜上 234
 今も、昔も 若菜上 234
 内にも、外にも 梅枝 160 柏木 37 早蕨 24 内も外も 帚木 99
 内裏にても、里にても 若紫 205
 海に入り、渚にのぼり 明石 62
 海の面にも、山がくれにも 明石 66
 御送り迎への人 桐壺 29
 劣り・勝り 東屋 182
 公・私 明石 69 露標 104 105 115 薄雲 224 梅枝 159 鈴虫 85 総角 452 公
 ・私に 松風 197 若菜上 304 橋姫 297 夢浮橋 424 公・私につけて
 て 帚木 85 公・私の 帚木 64 薄雲 244 307 公・私のことにつけて
 幸 81 公・私のことに触れつつ 若菜上 262 柏木 11 公・私引きか
 へたる世の有様 賢木 405 公にも私にも 総角 458
 かたち・心ある 紅葉賀 289 かたち、心も 東屋 136 かたちも・心
 も 東屋 182 かたち・心さま 総角 425 かたちも、心さまも 東屋
 156 かたち・心ばせなど 若紫 181 御かたち・心ばへ 桐壺 30 御
 かたちも、心ばへも 竹河 264

かたち・用意 若菜上 217 かたち・用意も 匂宮 231
 勝まけの乱声ども 螢 428
 上・下 蓬生 138 乙女 275 真木柱 134 若菜上 233 上・下となく 明石
 60 上・下の人 総角 455 蜻蛉 301 上・下の人々 幻 212 上・下ひ
 としく書く 末摘花 252 上も、下も 行幸 76 浮舟 261
 唐のも大和も 鈴虫 87 唐のも、大和のも 常夏 15 椎本 344
 唐の本ども、こゝの草の本など 若菜上 276
 かれ・これに合はす 常夏 19 かれ・これに通はす 乙女 287
 来し方・行く先 明石 59 若菜上 293 宿木 56 来しかた、行く先あり
 がたげなるまで 若菜上 231 来し方・行先の 夕顔 151 賢木 371 若
 菜上 293 宿木 44 来しかた・行くさきおぼし続けられて 賢木 371
 来しかた・行く先思ひ続けられて 総角 489 来し方・行く先かきくら
 し 須磨 31 来し方・行く先かきくらす心地して 賢木 384 来し方
 ・行く先くれて 玉鬘 342 若菜上 234 来し方・行く先たぐひなき
 御法 186 来し方・行く先の事うちおぼゆ 明石 61 来し方・行く先
 の事思し出づ 夕霧 142 来し方・行く先の大事 薄雲 233 来し方・
 行く先の通りも 若菜上 230 来し方・行く先のためしとなりぬべき
 事 夕顔 151 須磨 22 来し方・行く先も思えで 手習 355 来し方・
 行く先もためしあらじ 御法 188 来し方・行く先を思ひ屈ず 手習
 378 来し方・行く末 桐壺 31 須磨 11 薄雲 212 来し方・行く末あ
 りがたくものし給ひけるかな 野分 50 来し方・行く末 思ひ続け
 給ふに 須磨 11 来し方・行く末おぼしあはせて 明石 64 来し方
 ・行く末思し召されず 桐壺 31 来し方・行く末え迎ふところなく
 橋姫 308 来し方・行く末のこと……思ひ続けて 薄雲 219
 北・南、かたがたに分かれて 総角 183
 気色・心ばへは 夕霧 166
 気色・用意 早蕨 22 気色・用意などぞ 浮舟 235
 ここ・かしこ(ガ) 初音 381 夕霧 157 ここ・かしこ(ニ) 若紫 178
 紅葉賀 270 蓬生 152 乙女 319 螢 433 ここ・かしこ(ヲ) 夕顔 151 螢
 433 須磨 31 蓬生 152 総角 435 手習 373 ここ・かしこと 葵 328 こ
 ・かしこに 花宴 310 初音 377 横笛 66 夕霧 164 御法 175 こゝ・

かしこにて 乙女 320 宿木 123 こゝ・かしこになむ 東屋 184 こゝ
 かしこにも 総角 471 こゝ・かしこの(ガ) 帯木 69 夕顔 151 こゝ
 ・かしこの(連体修飾) 賢木 384 関屋 164 松風 202 野分 53 柏木 49
 こゝにも、かしこにも 乙女 314 宿木 88 こゝも・かしこも 末
 摘花 235 夕霧 163
 御心・有様 浮舟 202
 心ばせ・かたち 幻 119
 御心ばへ・有様 宿木 85 心ばへ・かたち 東屋 173 心ばへ・けはひ
 紅葉賀 238 浮舟 243 御心ばへ・もてなし 宿木 56
 来しかた・行くさき 須磨 52
 こなた・かたな(ガ) 夕顔 150 初音 396 こなた・かなた(ニ) 夕
 顔 140 竹河 293 こなた・かなた(ヲ) 椎本 351 364 宿木 39 こなた・
 かなた(トート) 梅枝 174 若菜下 342 こなた・かなたと 総合 178
 東屋 187 こなた・かなたに 賢木 381 乙女 284 螢 431 若菜下 346 夕
 霧 153 162 こなた・かなたにつつま 宿木 89 こなた・かなたにも
 胡蝶 401 こなた・かなたの 紅葉賀 289 葵 340 賢木 410 若菜下 339
 紅葉賀 336 こなた・かなたより 末摘花 242 若菜上 279 こなたを
 も、そなたをも 行幸 91
 この人・かの人 御法 197
 このも・かのも 明石 70 このも・かのもに 賢木 393
 この世・後の世 夕霧 145 宿木 67 東屋 162
 この折・かの折 手習 383 145 宿木 67 東屋 162
 これ・かれ 帯木 37 88 藤袴 107 若菜上 249 305 若菜下 384 柏木 32 50
 鈴虫 85 夕霧 102 幻 198 竹河 257 263 273 総角 399 435 451 早蕨 18 宿木 66
 これ・かれと 幻 196 浮舟 242 これ・かれに 須磨 15 朝顔 254 若
 菜下 356 匂宮 231 これ・かれにも 若菜下 356 総角 401 これ・かれ
 の 若菜上 225 これ・かれも 螢 426 夕霧 145 総角 385 これは、か
 れは 総合 178 玉登 370 これも、かれも 若菜下 347 浮舟 260
 左右の近衛 藤裏葉 204 左右の大將 若菜下 317
 草にも、真字にも 葵 353

前の世の報いか、此世の犯しか 明石 60
 寒さ・ぬるさ 若菜下 338
 過ぎにし方・行く先の御物語 若菜上 238
 その人、かの人 若菜下 349 御法 178 184 手習 400 その人の女、かの人
 の子 常夏 28 その折、かのをり 幻 203
 それ・かれと 若菜下 349 それか、かれか 帯木 157 それか、あらぬ
 か 帯木 57
 大・小の事 行幸 81 若菜上 216
 立ち・居 紅葉賀 273 明石 92 若菜下 324 東屋 134 146
 立つ声も、居かはるも 夕霧 100
 たはぶれごととも、まめごととも 椎本 352
 月日(用例多数につき、出所・頁数省略)
 とあらん折も、かゝらんきざみも 帯木 67
 とある事、かゝる事 若菜下 377 とある事も、かゝる事も 須磨 14
 宿木 95
 とある事、かゝる折 朝顔 267
 とあるさま、かゝるおもむき 若菜上 299
 とある筋、かゝるかた 若菜下 395
 とある折も、かゝるをりも 若菜下 416
 時にうつろひ、人にしたがへば 真木柱 135
 所につけ、人の程につつま 初音 389
 所のさま、人のけはひなどを 夕霧 131
 内・外ゆるす 朝顔 263
 夏・冬と 夕霧 109 夏・冬の 御法 170
 なにがし・これがし 夕顔 134
 なに・くれ 葵 335 なにの親王、くれの源氏 乙女 280
 なにや・かやと 夕顔 164 末摘花 245 花散里 420 松風 201 胡蝶 406
 御法 184 橋姫 303 総角 394 413 宿木 64 東屋 166 総角 385
 西・東にぞ 薄雲 245
 匂ふ兵部卿、薫る中將 匂宮 222 匂ふや、薫るや 竹河 289
 初め・終り 椎本 369

はかなきあだ事をも、まことの大事をも 帚木 74
 はかなき花・紅葉 桐壺 47 帚木 74 宿木 39 花・紅葉 明石 71 霽
 標 119 朝顔 266 乙女 324 椎本 349 宿木 98 花・紅葉の色をも、香を
 も、橋姫 299 花も、紅葉も 総角 438
 花の色・香 若菜下 353
 春・秋 賢木 406 明石 71 蓬生 157 乙女 323 野分 45 若菜下 329 335
 春の花の林、秋の野のさかり 薄雲 242
 左・右と 絵合 179 左・右に 空蟬 120 賢木 407 真木柱 124 藤裏葉 205
 若菜上 229 左・右にも 須磨 41 左・右の対 初音 389 左右の司の
 御馬 藤裏葉 204 左・右の戸 蓬生 147 左・右の御絵ども 絵合 183
 左・右より 若菜下 346
 人にまれ、鬼にまれ 蜻蛉 281
 人のため、わがため 夕霧 127 人の御ためも、わがためにも 夕霧 150
 人の朝廷にも、我が国にも 絵合 180
 人の御名をも立て、身をもかへりみぬ 柏木 15
 人も咎め、又、われながらも 若菜上 297
 昼・夜の六時の勤め 明石 74
 深きこと、浅きことのけぢめ 螢 433
 心ざしの深さ・あさゝのおもむきをも 乙女 303 ふかさ・浅さの程も
 橋姫 317 事の深さ・浅さは 絵合 186 深さ・浅さも 梅枝 160 深さ
 ・浅さを 常夏 15 梅枝 164
 臥し・起きなどす 若紫 232
 菩提と、煩惱との隔たりなむ 螢 433
 誠にや、偽りにや 螢 430
 前・後と 絵合 183 前・しりへの心 若菜下 318
 まめごとにも、あだごとにも 若菜下 398
 昔・今とも 御法 189 昔・今の 行幸 74 昔・今の御有様 鈴虫 86
 昔・今のことも 行幸 80 昔・今のと 梅枝 159 昔・今のに 螢
 433 昔・今の御物語に 幻 206 昔・今の物語を 初音 388 昔・今を
 かき集め 椎本 362 昔も、今も 乙女 292 行幸 73 総角 468 浮舟 215
 宿木 111

本・末 常夏 31 若菜下 333 早蕨 11
 唐土にも、我が御門にも 須磨 47
 唐土と、日の本とを 絵合 180
 やまとことの葉をも、唐土の歌をも 桐壺 39
 大和のも、唐のも 賢木 409
 行くかたも、帰らん里も 胡蝶 397
 夜・昼 若紫 220 須磨 28 乙女 300 玉鬘 330 行幸 72 若菜下 386 竹
 河 253 橋姫 332 東屋 210 手習 354
 わがため、人のため 梅枝 177 我がため、人のためも 宿木 94 わ
 がためをばさるものにて、この人のため 常夏 20
 わが身も、人の身も 幻 206
 我も、人も 帚木 67 花散里 420 朝顔 62 玉鬘 348 若菜上 239 251 若菜
 下 360 395 柏木 12 夕霧 154 勾宮 228 椎本 365 総角 384 432 459 浮舟 247
 手習 398
 をち・こちの 椎本 342
 男・女 桐壺 42 真木柱 154 男・女・頼むべき子どもにも 玉鬘 352
 右のように、名詞と名詞とを直接に対立させるほかに、間に語句を隔て
 て対立させているものもある。
 あがりての人には、……。まして、この後といひては、…若菜下
 あがりたる世には、……。世の末なればにや、…若菜下
 秋に、……。春の明(け)ぼのに、……薄雲
 大方の人目には、……。したの心には、……夕霧
 公も、……。世の人、……賢木
 公事の、……。私の心ざしの、……行幸
 かたちの、……。心さへこそ……乙女
 かれは、……。これは、……藤裏葉 188
 かれは、……。それに、これは、……若菜上
 昨日まで、……。けふは、……若菜上

224 218 247 274 74 406 95 244 351 352

ここの人目も……、かのおぼさん事も……
 去年より今年は……、昨日より今日は……
 上手は……、わるものは……
 そのかみだに、……今は、まして、……
 外は、……、内は、……
 鳥には、……蝶には、……
 鳥には、……てふは……
 春の花の木ども……、秋の草をも、……
 春は、……、秋は、……
 人のためにも……、我が御かたさまにも、……
 人のためにも……、我が身はた、……
 人の名をも立て、……、身づからも、……
 人は、……、我は、……
 人をも、……、身をも、……
 昼は、……、暮るれば、……
 昼は、……、夜々なむ、……
 昼は、……、夜は、……
 むかし、……、近き世にも、……
 唐土には、……大和言の葉には、……
 唐土には、……日本には、……
 世の人も、……、女御も、……
 よその覚えも、……、わが心地も、……
 世の人も、……、後の宮も、……
 男は、……、女は、……

(二) 動詞の対立

明かし、暮らす 葵 341 蓬生 141 松風 200 玉鬘 331
 分 50 若菜上 324 若菜下 378 夕霧 135 御法 187 螢 431
 304 椎本 352 総角 471 宿木 53 手習 402 幻 212 竹河 268 薄雲 216 野 橋姫

賢木 269 若菜上 367 帯木 69 朝顔 256 濯標 125 胡蝶 400 初音 399 薄雲 242 句宮 226 藤裏葉 183 柏木 41 梅枝 177 賢木 367 若菜上 302 若紫 205 若菜下 339 明石 93 若菜下 356 薄雲 442 薄雲 237 桐壺 42 夕霧 121 句宮 220 浮舟 232

明け、暮らす 鈴虫 70 椎本 365
 明け、暮る 明石 57 野分 45 夕霧 133 総角 399
 出で、入る 柏木 51 夕霧 162 句宮 223 東屋 136
 うかべ、しづめ 真木柱 137
 うけたまはり、聞え 鈴虫 87
 うちも笑まれ、涙もさしぐみ 帯木 64
 うつり、うつらず 蜻蛉 330
 起き、伏し 葵 327 賢木 387 螢 425 真木柱 149 若菜下 378 椎本 352 早
 蕨 11 宿木 42 111 手習 414 柏木 32 御法 189 椎本 365
 おくれ、先だつ 桐壺 31 柏木 32 御法 189 椎本 365
 劣り、勝らず 行幸 86 蜻蛉 287
 おはし、おはせず 浮舟 222 蜻蛉 287
 聞かず、見ぬ 若菜下 334
 御覽ぜられ、見たてまつらん 句宮 229
 たち、ある 明石 81 若菜下 324 東屋 134 146
 たちても、居ても 総角 425 常夏 30
 寝ても、覚めても 松風 195
 のぼり、くだり 総角 435
 ふしても、起きても 御法 187
 みしはなく、あるは悲しき 須磨 25
 行き、来に 夕顔 128 行き、来 の程 宿木 52 椎本 345 行き、来 の道
 蓬生 153
 往くと、来と 関屋 164
 居、立つ 桐壺 47 柏木 29

右のように、対立した動詞を重ねると、大抵は強勢の意を伴うものであるが、又対立する動詞の連用形に副詞語尾の「み」をつけたものを対立させて、「……したり、……したり」の意をもって、強める言い方をするこ

活けみ、殺しみ 螢 425
 泣きみ、笑ひみ 須磨 50 蓬生 151 松風 202 行幸 83 柏木 16 竹河 266

273 椎本 352 早蕨 14 蜻蛉 295
これと同じ形式で、同類語を重ねることによって、表現を強める言い方もある。

恨みみ、泣きみ 宿木 89
これも、「恨み言を言ったり、泣いたりして」の意である。

対立語ではないが、同じ動詞の間に、格助詞「と」を挿入して、強化する言い方も多い。

世にありとある 若菜下 352
行きて行きて 蜻蛉 295

又、格助詞「に」を挿入して強勢にする場合は、もっと多い。その場合には、用語例のほとんどが、「一途に」の意の副詞「ただ」の下に來ている。

たゞ、明けに明けゆく 若菜下 375

たゞ、急がしに急がし出づ 浮舟 226

たゞ、出で來に出で來 若菜下 393

たゞ、言ひに言へば 宿木 105

たゞ、言ひに言ひ放てば、夕霧 113

たゞ、入りに入る 夕霧 167

たゞ、來に來れば 蜻蛉 315

たゞ、暮れに暮れて 総角 424

たゞ、泣きに泣く 乙女 303 野分 63 行幸 74

たゞ、冷えに冷え入る 夕顔 149 夕霧 128

たゞ、ひそみにひそむ 東屋 184

たゞ、降りに降り落つ 柏木 47

たゞ、わなゝきにわななく 野分 49

「に」の下に、更に「のみ」「のみぞ」「なん」などの副助詞や係助詞を重ねて、更に強化する用語例もある。

泣きにのみ泣く 柏木 29

たゞ、泣きにのみぞ泣く 若菜下 394

たゞ、弱りになん弱らせ給ふ 総角 467

(三) 形容詞・形容動詞の対立・又は両者又は動詞との対立

あさきも、深きも 藤袴 103

あしくも、よくも 帚木 67 若菜上 224 柏木 44 浮舟 250

賤しう、あてなる 東屋 182

薄く、濃く 総角 436

疎きも、親しきも 胡蝶 415

遅く、疾き 幻 201

こき、薄き 野分 53 藤裏葉 206 若菜上 307 濃く、薄く 若菜下 342

盛りなるも、まだしきも 幻 200

白き、赤き 梅枝 172

高きも、賤しきも 霽標 130

高きも、短きも 椎本 376 東屋 162

近く、遠く 柏木 51

古き、新しき 梅枝 174 ふるきも、新しきも 絵合 177

善き、悪しき事 帚木 64 若菜上 306 よきも、あしきも 蜚 432

あしき 蜚 433 常夏 14 よしとも、あしとも 蜚 429 東屋 170 よし、

形容詞を強めるのには、次のように、「とも」を間に挿入して、同じ形容詞を重ねる方法がある。

あな、嬉しともうれし 玉鬘 347

次のは、動詞と形容詞との対立するものを重ねた用語例である。

ありや、なしや 浮舟 228 あるか、なきか 桐壺 31 葵 338 蓬生 155

玉鬘 367 朝顔 255 夕霧 99 総角 468

あるや恋しき、なきや悲しき 夕霧 135

老いたる、若き 手習 397

高きも、くだれるも 柏木 52 総角 403 高きをも、くだれるをも 蓬

生 144 深からぬに(や)、老いひがめるにや 総角 401

(四) 副詞の対立

さなむ、かくなむ 藤袴 100 夕霧 114

とあらば、かからば 総角 333
 とあるにつけても、かかるにつけても 総角 459
 とあるも、かかるも 夕顔 161 関屋 167 常夏 28 若菜上 256 柏木 47
 椎本 369
 と言はん、かく言はむ 蜻蛉 301 と言ひ、かくいひ 東屋 167
 と、かう 空蟬 120 若紫 179 末摘花 249 256 258 柏木 23 夕霧 139 椎
 本 353 376
 と、かく 帶木 57 64 70 74 夕顔 129 131 142 162 紅葉賀 295 葵 334 賢木 371 411
 曙標 123 乙女 275 玉鬘 335 344 螢 423 常夏 13 23 野分 48 51 56 真木柱
 128 梅枝 183 若菜上 239 若菜下 389 柏木 26 27 49 横笛 72 夕霧 116 122
 140 150 163 御法 185 186 幻 208 椎本 353 376 総角 397 409 宿木 97 東屋 146 147
 149 蜻蛉 280 浮舟 268 手習 414
 とかくして 柏木 28
 とかくに 帶木 70
 とかくにつけて 藤袴 99
 とかくの 夕顔 157 曙標 126
 とかくも 行幸 84
 とざま、かうざまに 若紫 220 須磨 15 曙標 124 132 松風 198 玉鬘 333
 螢 419 422 野分 51 柏木 11 夕霧 145 162 幻 204 竹河 291 椎本 374 総角
 382 386 440 宿木 41 43 90 96 東屋 190 浮舟 244 蜻蛉 285 手習 354 夢浮橋
 430 とざま、かうざまにつけて 夕顔 167 真木柱 124 とざまかうざ
 まにつけても 真木柱 123
 とざま、かうざまにも 常夏 22
 とざま、かうざまの 若菜下 403 夕霧 126
 とすれば、かかり 帶木 62
 とても、かうても 帶木 105 行幸 71 真木柱 126 夕霧 149
 とても、かくても 帶木 105 若紫 227 葵 343 薄雲 216 行幸 332 螢 436 438

藤袴 100 真木柱 139 若菜上 221 226 292 302 312 若菜下 328 389 400 東屋 177 浮
 舟 202 261 265 蜻蛉 282 288 310
 となるとも、かうなるとも 真木柱 134
 とに、かくに 総角 409 とにかくにつけて 帶木 70 94 115 とにかくに
 つけても 匂宮 222
 とまれ、かくまれ 手習 386
 ともあれ、かくもあれ 明石 65 篝火 39
 とも、かうも 若紫 198 226 夕霧 145 椎本 351 宿木 32
 とも、かくも 桐壺 31 帶木 68 94 115 若紫 198 紅葉賀 288 行幸 91 91
 藤袴 102 真木柱 126 127 134 136 148 若菜上 215 若菜下 365 総角 383 400 445 448
 宿木 35 39 55 80 東屋 139 157 162 171 179 185 浮舟 242 蜻蛉 299 手習 414
 とや、かうやと 藤袴 185
 とや、かくやと 葵 354 明石 61 若菜下 397 総角 438 東屋 182

以上、これ又煩わしいほどに対立語をあげて、横道に深入りしてしまつた。しかし、源氏物語の語彙の豊富さは、対立語よりも、むしろ同意語又は類似語の重ね方の、心憎いまでに深味のあることである。名詞と名詞、動詞と動詞、形容詞と形容詞、形容動詞と形容動詞、副詞と副詞、又は他の品詞同士が、二つ三つ、四つと重なり合うのも多い。源氏物語の音読・朗読の味は、こういう所から生まれるのだが、詳しくは他日を期したい。

五

同語反復・同意語反復は暫く置き、対の句、反意語の対立について右に述べた。

次には、先に掲げたいわゆる慣用語句に当たるものを広く源氏物語の語彙から五十音順に拾って、簡単な説明と出典とを記しておく。

あゝ 反応を示す擬声語。不審な時に発する声。もう／＼に、耳もおぼ／＼しかりければ「あゝ」と、かたぶきて居たり。 若菜上 三 280

愛敬こぼる かわいさがあふれて顔色にいっぱい現われる様子・比喩。

女君、ありつる花の露にぬれたる心地して、そひふし給へるさま、美しう、らうたげなり、あい敬こぼるゝやうにて。 紅葉賀 一 286

女君、顔は、いと赤くにほひて、こぼるばかりの御愛敬にて、涙もこぼれぬるを、よろづの罪わすれて、 落標 二 102

御指貫のすそまで、なまめかしう、愛敬のこぼれ出(づ)るぞ、あながちなる見なしなるべき。 松風 二 206

折にあひたる色あひの、なつかしき程に重なりたる程まで、愛敬のこぼれ落ちたるやうに見ゆる、御もてなしなども、 竹河 四 264

あが君 親しみの呼び掛けに用いる語。あが君生き出で給へ。

あが君／＼ あなた様あなた様。どうぞ助けて下さいの意のきまり文句。夕顔 一 150

女、「あが君、／＼」と、むかひて手をするに、ほと／＼笑ひぬべし。 紅葉賀 一 295

あが仏 私の信頼する人よ。信頼して懇願する時などに呼び掛ける語。あが仏。京に出で給はゞこそ、あらめ。 手習 五 352

明くなる あたりが明るくなる。空が明るくなる。「あかし」ともいう。ことゝ、明くなれば、障子口までおくり給ふ。 帚木 一 99

足参る 堅くなった足をこすりさすって柔らかにする。足にあんます。中将の君といふに、御足など参りすさびて、大殿籠りぬ。 葵 一 356

大殿籠るとて、右近に御足まゐりに、召す。玉鬘 二 356

足を空に 足が地につかずに。落ち着かないでよろ／＼する比喩。様子。殿の内の人、足を空にて思ひ惑ふ。 夕顔 一 163

足を空にて、誰も／＼まで給ひぬれば、葵 一 339

足を空に、思ひまどふ人多かり。賢木 一 377

波いと厳しう立ちて、人／＼の、足をそらなり。須磨 二 52

汗流る 恥ずかしさや怖ろしさで、冷汗が出る。ひどく汗が出る様子。我(が)身ながら、これに似たらむは、……あながちなるや。宮は、わりなく、かたはらいにきに、汗も流れてぞおはしける。

紅葉賀 一 285

汗におしひたす 汗でびっしょりと濡れる様子・比喩。「……人も、いかに、「あやし」と思ふらむ」とて、御衾をひきやり給へれば、汗に、おしひたして、額髪も、いたう、ぬれ給へり。 葵 一 358

汗になる 汗びっしょりになる。汗にひたさる。女は、この人の思ふらん事さへ、死ぬばかりわりなきに、流るゝまで汗になりて、いとなやましげなる、いとほしけれど、 帚木 一 96

あなかま ああ、やかましい。静かにせよ。人の言う事を制止する時に用いるきまり文句。「あなかま／＼」「あなかまや」ともいう。よろしき大人出で来て、「あなかま」と、手かくものから、 夕顔 一 134

「さりとも、いたづらにはなりはて給はじ。夜のこゑは、おどろおどろし。あなかま」といさめ給ひて、いとあわたしきに、 夕顔 一 150

人／＼「いと、かたはら痛し」と思ひて、女房「あなかま」と、きこゆ。 同 211

ある限り、さわぎ惑ふを、夕「あなかま。しばし」と、しづめ顔にて、御法四 185

「あなかま。人に聞かすな。わづらはしき事もぞある」など、手習五 348

あなかま／＼。下衆などの、塵ばかりも聞きたらむに、いといみじからむ 浮舟五 221

あなかまや。 明石二 93 宿木五 106

あなかま、たまえ(たまへ)。 玉鬘二 350 浮舟五 217 (大系二 467頁補注 322)

雨の脚 ①雨が降りながら通って行く状態の比喩。雨の足、あたるところ通りぬべく、はらめき落つ。 須磨二 53

やう／＼風なほり、雨の脚しめり、星の光も見ゆるに、 明石二 60 ②速いものの比喩。内(裏)より御使、雨の脚よりも、けにしげし。 夕顔一 164

あやめもわかず 物の分別もつかない比喩。「菖蒲」と「綾目」文様」とを掛ける。何のあやめも思ひしづめられぬに、えならぬ根をひきかけ、 帚木一 86

海松や時ぞともなきかげにゐて何のあやめもいかゞわくらむ 落標二 113

「あらはれていとゞ浅くも見ゆる哉あやめもわかずなけれねの 若々しく」とばかり、ほのかにぞあめる。 螢 二 426

天の下を倒になす たとえ世の中をひっくり返しにしても。あり得べからざる事の比喩。あめの下を、さかさまになしても、思ひ給へよらざりし御あり様を見給ふれば、よろづ、いと、あぢきなくなん

須磨 二 14

天の下ひゞく 天下に評判の立つ程に。世評の高くひろがる比喩。「天下、ひゞきて、うつしく見えつる御かしづきに」宿木 五 110

ありつる 先刻の。前述の。先程からあった。さっきの。「あり」に存在の意はない。「あつた」と訳しては不可。「ありし」が、遠い過去・生前等の意であるのと区別がある。ありつる小桂を、さすがに、御衣の下に引き入れて、大殿籠れり。

(一)空蟬 119 夕顔 126 末摘花 242
紅葉賀 286 花散里 419 (二)朝顔 261 (三)若菜上 50 295 横笛 66 夕霧 141 橘

姫 316 (四)浮舟 271 蜻蛉 331 手習 343 346

あるにもあらず 氣を失った状態の比喩。あるにもあらず、過ぐし来にける年月の、四椎本 341 あるにもあらず見ゆ。四総角 463

あれにもあらず 途方にくれて、忙然としている比喩。世づかず、うひ／＼しや。あれにもあらねば、返すべくもおぼえず、(二)玉鬘 338

あれは誰どき 夕暮れの薄暮の時。「かは誰時・たそ彼時」と同意。あれは誰どきなるに、ものの調どもおもしろく、(二)初音 384

泡の消え入るやう 人の死のはかないさまの比喩。女宮にも、つひに、対面し聞え給はで、泡の消え入るやうにて、亡せ給ひぬ。四柏木 35

案に落つ 物事が推測どおりだと思ふような事になる。かく、人の推し量る、案におつることもあらましかば、いと口惜しく、(三)藤袴 107

息の下 聞こえるか聞こえないくらい、かすかな声。声の低い様子・比喩。わづかなる声聞くばかり言ひよれど、息の下にひき入れ、言ずくななるが、(一)帯木 63 「人違へにこそ侍るめれ」と、いふも息の下なり。(一)帯木 95 息の下にのたまふ。四総角 455

息をのぶ 息をのびのびとつく。安心した様子。「に」が上に来る。この人に、息をのべ給ひてぞ、悲しきことも思されける。(一)夕顔 152

いざ給へ さあ、一緒に来給へ。さあ、共に行き給え。「いざ給へかし」「いざ給へよ」ともいう。「給へ」に「下さい」の意はない。い

ざ給へ。(一)若紫 225 葵 324 (四)浮舟 269 手習 355 377 いざ給へかし。

四夕霧 166 いざ給へよ。(一)若紫 217

いたゞきに捧ぐ 頭上に差し上げるようにして崇める比喩。「わたくしの君」と思ひ申して、いたゞきになむ捧げたてまつるべき。(二)玉鬘 337

命をかく ①一命を託する。命をつなぐ。抛り処にする、力にする比喩。かくたまさかの御なぐさめにかけ侍る、命のほども、はかなくなむ。(二)落標 114 かずならば厭ひもせまし長月に命をかくるほどぞは

かなき (三)藤袴 113 ②命を賭け物にする。物事を命がけでする比喩。命をかけて、何の契(り)に、かゝる目を見るらむ。(一)夕顔 151

命を極む ①命を終わる。死ぬ。何ばかりのあやまちにてか、この渚に命を極めむ。(一)明石 59 ②命がけの危険にあう比喩。げに、かく命をきはめ、世に、又なき目の限りを見尽くしつ、(二)明石 65

命を護る 命をかける。我は、命を譲りて、かしづきてむ。(四)東屋 133 「この君のゆかり」と思はん人のためには、命をも、譲りつべくこそ思へ。(四)東屋 145

言はぬは言ふにまさる 口に出して何も言わないほうが、口に出していうよりはまさっている。沈黙を高くかう諺。いはぬをいふに勝ると知りながら押しこめたるは苦しかりけり (一)帯木 250

言はむ方なき 言おうとしてもいえない。何とも言いようがない。「言ひ尽くすべくもあらず」「いひ知らず」「いひやる方なし」「いふよしなし」も同じ。形容の詞もない様子。いはむかたなき盛りの御かたちなり。(二)松風 206 須磨 26 明石 59 四十人の垣代、いひ知らず吹き立てたるものゝ音どもにあひたる松風、(一)紅葉賀 274 賢木 385 (二)落標 108 かくのみ、いひやる方なくて、帰り給ふ物から、(一)紅葉賀 283 はかなく、いひなさせ給へるさまの、いふよしなき心地すれど、(一)賢木 387 (二)須磨 52 明石 76

色にいだす 色として出す。顔色に表わす。外に表わす。否定形で用いる。中／＼危くおぼし憚りて、色にも出ださせ給はずなりぬるを、(一)桐壺 42 (二)関屋 165 朝顔 257 玉鬘 371 四柏木 39 幻 196

色に出づ ①色として出る。外に現われる。人に知られる。様子に出

す。懸想している事を、様子に出す。恋を打ち明ける。色に出で給ひてのちは、「太田の松」の、おもはせたる事なく、むつかしく聞え給ふこと多かれば、(一)胡蝶⁴¹⁵ いまさらに色にな出でそ山桜およばぬ枝に心かけきと (二)若葉上³¹⁴ ②はげしく顔色に出す。表面に出す。口に出す。怒ったり、恨んだりする時の様子。年ごろきこしめし、思しめける事、色に出(で)て、うらみ聞え給ふべきにもあらねば、(四)柏木²⁵ ③寒さなどのために、顔が赤くなる。赤く色づく。鼻の、色に出で、(一)いと寒し」と見えつる御おもかげ、ふと思ひ出でられて、ほゝふまれ給ふ。(一)末摘花²⁶⁰

うき名もり出づ あだな噂がそれとなく立つ、浮いた評判が立つ比喩。かゝること、とだえずば、いとゞしき世に、うき名さへ、もり出でな(一)賢木³³⁸

うき名を流す あだな噂が盛んに伝はる比喩。心よりほかに、若くしき物おもひをして、つひに、うき名をさへ流しはすべき事と、(一)葵³⁴⁴ うき目みる つらいと思うことを経験する。つらい思いをする。つらい目にあう。うきめみしその折よりも今日は又過ぎにしかたにかへる涙か (二)総合¹⁷⁸

うちほほゆがむ 事実を間違つて言いふらす。「ほほゆがむ」に同じ。すべて、世の人の口といふ物なん、誰がいひ出づることともなく、おのづから、人のなからひなど、うちほほゆがみ、思はずなる事、出でくる物なめるを。(二)若葉上²⁴⁰

うつしとる 顔がよく似ている様子。生き写しである。いと、あさましう珍らかなるまで、うつしとり給へるさま、まがふべくもあらず。

(一)紅葉賀²⁸²

うはの空 ①空の上のほう。空の中ほど。中途半端の比喩。山の端の心も知らで行く月ほうはの空にてかげや絶えなん (一)夕顔¹⁴² はかなくてうはの空にぞ消えぬべき風にたゞよふ春のあは雪 (二)若葉上²⁵⁵ ②心を奪われている。ほかの事に注意が向かない。ある事に気を取られて、そわそわし、相手の言う事などに全然注意しない様子・比喩。おしなべてたゞく水鶏におどろかばうはの空なる月もこそ入れ (二)落標

115 河づらのすまひ、いとゞ、心ほそさまさきて、うはの空なる心地のみしつゝ、明かし暮らすを、(一)薄雲²¹⁵ ③雲をつかむように、何の連絡もない様子。「うはの空にて、物したらんこそ、なほ、便なかるべけれ」と、思ひわづらひて、帰り給ふに、(二)夢浮橋⁴²⁴ 馬より下る 馬上から地上に降りる。君も、御馬より下り給ひて、御社の方を拝み給ふとて、神に、まかり申(し)給ふ。(二)須磨²⁶ 馬よりすべり下る 馬上から地上にすべつて落ちるように、ずるずると降りる。堤の程にて、馬より、すべりおりて、いみじく、御心地惑ひければ、(一)夕顔¹⁶²

海に入る ①海に身を投げる。海中に投身する。「海の底に入る」「波(海)の中にまじり失す」ともいう。もし、われに後れて、その心ざしとげず、此(の)、おもひおきつる宿世たがはゞ、海に入りね。(一)若紫¹⁸¹ ②海に落ちて、溺れて死ぬ。供人「いま暫し、かくもあらば」

供人「波に引かれて、いりぬべかりける」(二)須磨⁵³ 命ながくて、思ふ人／＼に後れなば、尼にもなりなむ、海の底にも入りなん。(二)須磨⁴⁸ かくながら、み捨て侍りなば、浪の中にもまじり亡せね。(二)明石⁷⁴ 恨み負ふ こちから他人の恨みを招き寄せる。人から恨まれることの比喩。あさゆふの宮づかへにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけむ、(一)桐壺²⁷ この人の故にて、あまた、さるまじき、人の恨(み)を負ひし果て／＼は、同³⁸ いづれをも、

なだらかに、もてなして、女のうらみな負ひそ (一)葵³¹⁸ 恨み解く 他人から受けている恨みがなくなる。怨恨が解消する。「恨み忘る」(二)薄雲¹³² 「恨みの心解く」に同じ。その対立語が、「恨みとまる」(二)横笛⁴⁷ 「恨み残す」(一)葵³³² 「恨み残る」(二)薄雲²³³

(二)鈴虫⁹⁰ 「さりとも、今宵、日ごろの恨みは解けなむ」(一)帚木⁷³ 「学問などして、すこし物の心もえ侍らば、その恨みは、おのづから、解け侍りなん」(一)乙女²⁷⁸ この世にて、その恨みの心とけず、過ぎ侍りにしを、(二)落標¹³¹

えならず 一通りでない。言いようもない。言う事もできない。「えになる」(「え言へに」の意)を「おぼろげなる↑↑おぼろげならぬ」

のように用いたものか。「えも言はず」も同意の語である。かはほりのえならず絵かきたるを、さし隠して、見かへりたるまみ、いたう見延べたれど、(一)紅葉賀²⁹⁰ なよらかにをかしき程に、えならず句ひてわたり給ふを、見いだし給ふも、たゞにはあらずかし。(二)若葉上²⁴⁸ えならず、たきしめ給へる御けはひ、いはむ方なし。(三)宿木⁵⁷ えならぬ(一)若紫²¹² 紅葉賀²⁷⁴ 同²⁹⁵ (二)乙女³²⁵ 初音³⁷⁹ 螢⁴²³ (三)若葉上³⁰⁵ (四)紅梅²⁴⁶ えならぬに (一)初音³⁸⁹ 夜深きあかつき月夜の、えもいはず霧りわたれるに、(一)賢木³⁸² えもいはずすぎに、(一)朝顔²⁶⁶ えも言はぬ句ひ (一)胡蝶³⁹⁶ えも言はずおもしろし。(二)乙女³²⁴ 老いの浪 老年の比喩。「老(い)の浪に、さらにたち返らじ」と思ひとちめて、この浦に、年ごろ侍りし程も、(三)若葉上²⁸⁶ 尼君をば、おなじくは、老いの波の皺、のぶばかりに、人めかして、まうでさせむ (三)若葉下³³¹

臆だかし 臆し勝ちである。ともすると氣遅れがする。臆病である。臆だかきものどもは、ものも思えず、つながぬ舟に乗りて、池に離れ出でて、いと、すべなげなり。(二)乙女³¹³

音聞 評判。世間の取沙汰。世にたぐひなき御有様の音聞に、罪許し聞えて、おどろ／＼しうも、嘆かれず。(一)末摘花²⁵⁰

音に聞く 噂に聞く。評判できく。なほ、音に聞きて、思ひやる事の、片はなるよりも、見苦しき事の、目に見るは、こよなく際まさりて、をこなり。(四)幻¹⁹⁹ 絶間あるべく、おぼさるらんは、音に聞きし御心のほど、しるきにや、(四)総角⁴²⁷ 年頃、おとにのみ聞きて、「いつかは、さる人の御有様を、ほのかにも見たてまつらむ」など、(はるかに思ひきこえしを、かく)思ひかけざりし御住ひにて、(二)明石⁸⁰ 音に立つ 音にして高く立てる。物におそはるゝ心地して、「や」と、おびゆれど、かほに衣のさはりて、音にも立てず。(一)帯木⁹⁴

(に) おづ こわがる。格助詞「に」を承ける。「もし、受領の子どものすき／＼しきが、頭の君におぢ聞えて、やがて、ゐて下りたるにや」とぞ、思ひよりける。(二)夕顔¹⁷³

思しあがる 誇りをもちなさる。「思ひあがる」の尊敬語。心一つにお

ぼしあがるとも、(二)蓬生¹⁴³ やむごとなきさまにおぼしあがり、大將殿などもおはしまし通ふ御宿世のほどを、かたじけなく思ひ給へられしかばなん、同¹⁴⁸

(に) おぼゆ 似ている。ある人を見て、ある人を自然と思ひ出さずにいられない、の意から来たもの。上に格助詞「に」をとるのが普通である。まじりのとちめ、をかしうかをれる気色など、いとよくおぼえ給へり。(四)横笛⁷¹ ところ／＼言ひ消ちて、「いみじく物あはれ」と、思ひ給へるけはひなど、いと、よう、おぼえ給へると、(四)早蕨¹⁹ さま／＼の御物思ひに、少し、うち面やせ給へる、いと、あてに、なまめかしき気色まさりて、むかしの人にもおぼえ給へり。同¹²

面がくし 照れかくし。宮も、なまはしたなきに、細やかなる事などは、ふとも、え言ひ出で給はぬ、面がくしにや、(四)宿木⁵⁹ この子の思ふらん事も、はしたなくて、さすがに御文、おもがくしに広げたり。(一)帯木¹⁰¹

面影におぼゆ 幻影となって思ひ出される。影のように、目先にちらつく。「面影におもほし出づ」はこの尊敬体。夜昼、おもかげに思えて、今は、殊に、心あわた／＼しう行きかゝづらふかたもなく、しめやかにて、あるべきものを、(二)須磨³⁴ 明石⁶³ 朝顔²⁶⁹ (四)浮舟²³² かの、ありし院に、この鳥の鳴きしを、「いと恐ろし」と思ひたりしさまの、面影に、らうた／＼おもほし出でらるれば、(一)夕顔¹⁶⁸

面影に恋し 幻影となって、目先にちらついて見えて恋しい。内裏にも院にも、あからさまに参り給へる程だに、しづ心なく、面影に、こひしければ、(一)葵³⁶⁶ (四)竹河²⁷¹ 幻²⁰⁴ (四)宿木⁵¹

面影に添ふ 幻影となって、身に添ふ。幻影として目先にちらついて離れない。「面影添ふ」(明石⁹³)「面影身に添ふ」(須磨³²)も同意。おほどかにをかしかりつる御けはひども、面影に添ひて、(四)橘姫³²³ (一)桐壺³⁴ (二)須磨²⁹ 恨み給ひし様、の給ひしことゞも、面影に、つと添ひて、いさ／＼かまどろめば、夢に見え給ひつゝ、(四)浮舟²⁴¹ 面影に見ゆ 幻影となって目先に見える。物思ひて居たらむ様のみ、面影に見え給ふ。(四)浮舟²⁴⁵ (一)夕顔¹⁴⁹

面だたし 晴れがましい。名譽である。「おもだしく、嬉し」と思ふ

事も、多くなありける。(二)薄雲 226 玉鬘 355 (三)常夏 23
面あかむ 恥かしさに顔を赤くする。恥かしがる。「おもてうち赤む」

(霧標 110 野分 56 総角 421 夢浮橋 427) も同じ意味である。命婦面あ
かみて見たてまつる。(一)末摘花 262 賢木 410 (二)乙女 297 312 玉鬘 268

(三)行幸 96 真木柱 144 藤裏葉 204 若菜上 304 (四)手習 378
面色かはる 自責の念で、顔色が変わる。中将の君、面、色かはる心地

して、恐ろしくも、かたじけなくも、嬉しくも、あはれにも、かたじけ
移ろふ心地して、涙おちぬべし。(一)紅葉賀 285

面おこし 名譽を回復すること。面目を施すこと。「面臥せ」はこの対
立語である。何事にも、はか／＼しからぬ身づからの面起しに、(一)

賢木 369 面ぶせ 不面目。つらよごし。「うとき人に見えは、おもてぶせにや思
はれん」と、憚り恥ぢて、(一)帶木 70 (二)蓬生 147 松風 191 (三)若菜下

331 (四)椎本 350
思ひあがる 誇りを持つ。「氣位が高い」「高く留っている」の訳があ
るが、もともとは、平安時代の貴族のもつモラルで、プライドをもつ

ことであった。はじめより、「われは」と、思ひあがり給へる御かた
／＼、めざましき者におとしめそねみたまふ。(一)桐壺 27 帶木 89

(二)朝顔 268 胡蝶 398 蓬生 142 明石 70 初音 378 (四)柏木 40 匂宮 225
思ひおこる 得意になって傲慢する。我(が)御姫君たちを、「人に劣

らじ」と、思ひおこれど、この君に、えしも勝らずやあらむ。(四)紅
梅 239

思ひなし 氣のせい。ほのかなる曇つきにて、思ひなし、心憎し。(一)
葵 347 賢木 378 (二)明石 79 玉鬘 336 (四)匂宮 230 橋姫 308 総角 428 429

思ひのぼる 誇りを持つ。高望みをする。プライドを持つ。いみじく思
ひのぼれども、心にしもかなはず、限りある物から、すき／＼しき心

など、使はるな。いはけなくより、宮のうちに生ひ出で、身を、心
にまかせず、所せく、……世にはした(な)められき。(三)梅枝 177

以上、ア行に関するもので、慣用語、又はそれに準ずるものを挙げて
みたが、まず、際限がない。身体に関するもの、例えば

頬杖つく(葵 345 霧標 125 若菜上 248)・頬杖をつく(帶木 69) 手打た
ぬ心地す(常夏 28) 手を打つ(玉鬘 36) 手をおし摺る(明石 93 行幸

96) 手をする(紅葉賀 295 夕霧 150) 手をおしもむ(常夏 27) 手かく
(夕顔 134 柏木 35) 手をさし出づ(松風 205 末摘花 245) 手たたく(夕

顔 147) 手にかくる(竹河 275)
等々、到底一度にはあげきれない。その上に、「あはれ知り顔に」(早蕨

14) などという「顔」を使った慣用語表現や、死ぬことを、「消え入る」
(夕霧 128、御法 177)「消え入るやうにす」(柏木 27 28) というような婉曲

法・隲化法による表現、はた又、「悪しき道に漂ふ」(帶木 66) のような仏
教関係の慣用語、中国の故事や、漢文・漢詩・和歌・朗詠などから来てい

る歴史的な慣用語などを拾って行くことになる、数限りないものとなろ
う。今回はこれで一度筆をおいて、方面を改め、語法関係のものについ

て、次に二、三調べてみようと思う。

六

もぞ・もこそ

「もぞ」「もこそ」は、「万一を気づかって不安に思われる意」に用い
られることがあるとか、「ある事を予測または仮想し、これに伴う不安、
懸念、困惑、危惧等の心を表わす。口語の『ソウナリデモシタラ、タイヘ
ンダ』『ソウナッタラ困ル』というほどの意に当たる」とか言われている。

「もぞ」も「もこそ」も、ともに、もと係助詞「も」と、「ぞ」「こそ」
とがそれぞれに重なったもので、語法上は一語の複合助詞となっている。
係助詞「も」が、「ぞ」「こそ」と重なったために、それぞれの助詞には
なかった、ある意味が加わっているのは、一種の語法上の慣用語とみるこ
とができる。

源氏物語でも、この慣用語法があり、上に述べた説が、ほとんど例外な
しに該当するように用いられている。以下、「もぞ」「もこそ」について、

それぞれの用語例を検討してみよう。

この慣用語法については、岩井良雄氏も指摘しておられるように、すでに本居宣長が、「詞の玉緒」で述べている。すなわち、「詞瓊編三之卷」「ぞ」の条に、⁹⁾

○もぞ これは行末をかねておしはかりて。あやぶむ意のてにをは也。つねのぞと一つながら意かはる也。「結びは常のぞに同じ。但しんと結べる例はなし。せんなどゝいふべき所をも。するとやうにむすびたり。

とあり、又、同じく、五之卷「こそ」の条には、¹⁰⁾

○もこそ もこそは行末をおしはかりてあやぶむ意の辞也。つねのこそと意かはれり。「ぞともぞとのけぢめのごとし。三之卷ぞの部のもぞの条とむかへあはすべし」

とある。まず、「もぞ」には、次のような用語例がある。

- 1 冷泉「さらば。物懲りして、また出だしたてぬ人もぞある。いとこそからかれ。人より先にすゝみにし心ざしの、ひとにおくれて、気色とりしたがふよ。昔の、なにがしがためしも、ひき出でつべき心地なむする」とて、「まことに、いと口惜し」と、おぼし召したり。(――や。。や……は筆者が加えたもの。以下同じ。) 真木柱 三 146
- 2 御文は、「あまり人もぞめ、たつる」などおぼして、すくよかに、源文「おぼつかなき月日も……、くちをしう思ひ給ふる」など、親めき書き給ひて、 真木柱 三 152
- 3 大君「世(の)中に、久しくも」と、おぼえ侍らねば、……。すこし思し慰みなりに、知らざりしさまをも聞えん。「にくし」と、な

おぼし入りそ。罪もぞ得たまふ」と、御髪を撫でつくろひつゝ、きこえ給へば、 総角 四 420

- 4 妹尼「あなかま。人に聞かすな。わづらはしき事もぞある」など、口がためつゝ、尼君は、おやの思ひ給ふよりも、この人を、生け果てゝ見まほしう、愛しみて、うちつけに、添ひ居たり。手習 五 348
- 5 一とせの、春宮の御元服、南殿にてありし儀式の、よそほしかりし御ひゞきに、おとさせ給はず、所／＼の饗など、帝「内蔵寮・穀倉院など、公事に仕うまつれる、おろそかなる事もぞ」と、とりわき仰せ言ありて、清らを尽くして仕うまつれり。 桐壺 一 48

1 は、鬚黒大將が、百方手を回し、又玉鬘の実父の内大臣などもうまい工合に謀らつたので、冷泉帝が玉鬘の退出をお許しになつた場面である。退出させずに御所に留め置いては、懲り懲りして、二度と参内させない人――夫の鬚黒――が玉鬘に付き添っている。そんな事があつては、大層辛く情けないと思つて、退出をお許しになるのである。

2 は、光源氏が玉鬘につかわす御文に、程度以上に他人が注目するような事があると困ると考えて、生真面目に、父親めいた御文を書くという場面である。

3 は、宇治の八宮の大君が、匂宮が中君に忍び逢われた突然の事件に対して、妹の中君に、「私を憎んではいけない。無実の人を憎んだりすると、私の罪を得なさることがあるかもしれない、そんなことがあつては困る」といって、御髪を撫でつくろい／＼して上げている場面である。

4 は、阿闍梨の妹尼が、「浮舟に興味を持つてがや／＼言う口うるさい世人に聞かせると、世間の噂になつて厄介な事になるかもしれない。そんな事があつては困る」と、僧達に口止めをしているところである。

5 は、第二皇子たる光源氏の御元服に際して、第一皇子の春宮の御元服には劣らないようにと考えられ、「内蔵寮や穀倉院などが、お役所仕事として奉仕したのは、疎略な事があるかもしれないぬという懸念がある。そんな事があつては困る」と、帝が仰せられるくだりである。

「もぞ」を受ける結語は、「ぞ」の場合と同じで、それぞれ、「ある」

「めだつる」「(得)たまふ」「ある」というように、動詞(補助動詞を含む)の連体形そのまま、推量の助動詞「む」などを添えることはない。これは、「もぞ」に既に慣用語法として、予測・仮想の意味があるために、これを添える必要がないからである。⁽¹¹⁾5は、係助詞「もぞ」の係りだけで終わっているが、下に結語「ある」が省かれているのである。

これらの用語例には、いずれも、ある事を予見し、これに伴う不安・懸念・困惑・危惧等の心を表わしている面がある。しかし、上に「し」があり、「しもぞ」となると、これらの意味はない。

6 何事につけても、見まさは難き世なめるを、つらき人しもぞ、あはれに思え給ふ、人の御心ざまなる。 葵 一 347

7 よろづの事、みかどの、御心一つなるやうに思し召し急げば、御後見なきしもぞ、中／＼めでたげに見えける。 宿木 五 107

8 女房「かゝる、御有様を、御覧じ知らぬよ」など、さかしがる人もあれど、右近「あなさま、たまえ。夜声は、さゝめくしもぞ、かしがましき」など、言ひつつ寝ぬ。 浮舟 五 217

6では、「つらき人しもぞ」以下の文は、源氏につれなくあたる人が、却って源氏にはしみ／＼可愛いと思われなさる、そういう源氏の御癖である、というのであって、決して、不安・懸念・困惑・危惧等の心を表わしていない。

7は、万事万端の準備を、今上が御一人の御心のとおりにお考えになつてなさるので、母女御のお世話のないのが、却って準備の進行上王合がよさそうに見えるのであった、という意である。「しもぞ」のついたことによつて、「御後見なき」事が、不安等々の原因にはなっていない。

8では、右近のことばは、「ああ、やかましい、おだまりなさい。夜の声は、小声でひそひそささやくのが、却ってどうもやかましい」という意味である。この例だけは、困惑の意が含まれているようにとれないでもないが、「しもぞ」をつけたねらいは、「さゝめく」を強調したところにある。⁽¹²⁾「詞瓊綸」の巻之七にも

○しもぞ これはしもとぞとを重ねたるにて。ぞはつねのぞの意なり。もぞの意にあらず。さてしもに却てという意を軽くふくめり。

とあるように、これらの「しもぞ」は、「しもぞ」で一語の複合助詞ではなく、「し・も・ぞ」、又は「しも・ぞ」で、三つ、又は二つの助詞の重なったものである。これらは、いずれも、上につく語を特別に強調するためにつけたものであって、不安・懸念等の心を表わすのがめあてではない。6・7・8の三つの用語例が、ともに、「却って」という意を軽く含んでいるのは、本居宣長の説のとおりである。

「源氏物語大成」の索引によれば、「もぞ」6、「もぞ・と」1、「もぞ・など」1、と合計9例がある。右の用語例は、この索引に関係なしに、大系本の本文を順に拾ってゆき、意味の上から検討したものである。

次に、「もこそ」には、次のような用語例がある。

9 源「心はづかしき人、住むなるところにこそあなれ、あやしうも、あまり、やつしけるかな。きゝもこそすれ」などの給ふ。 若紫 一 179

10 少納「例の、心なしの、……いづかたへか、まかりぬる。いと、をかしく、やう／＼なりつるものを。鳥などもこそ、見つくれ」とて、たちて行く。 若紫 一 184

11 尼「ひがごと聞き給へるならむ」と、いと、恥づかしき御けはひに、何事をは、いらへ聞えむ」と、の給へば、女房「はしたなうもこそ、おぼせ」と、人々聞ゆ。 若紫 一 194

12 まみ・口つき、たゞ、春宮の、御同じさまなれば、「人もこそ、見たてまつり咎むれ」と、み給ふ。 葵 一 263

13 大方の事ども、宮の御方に触れたることなどをば、……何事も、後見きこえならひ給ひにたれば、「人、『あやし』と、見とがめもこそすれ」と、おぼして、まかで給ふべき日、まゐり給へり。

14 源「いと、うたて、あわたゞしき風なめり。御格子下してよ。男子どもあるらんを。あら、は、にもこそあれ」と、きこえ給ふを、また寄てみれば、物きこえて、おとども、ほゝ笑みて、みたてまつり給ふ。

15 中将、柏「しか、かしづかるべき故こそ、物し給ふらめ。さても、誰がいひし事を、かく、ゆくりなく、うち出（で）給ふぞ。物言ひたゞならぬ、女房などもこそ、耳とゞむれ」とのたまへば、

16 ひめ君は、殿、いとかなしうしたてまつり給ふならひに、「みたてまつらでは、いかでかあらむ。今などもきこえて、またあひ見ぬやうもこそあれ」と思ほすに、うつぶしふして、「えわたるまじ」と思したるを、北方「かくおぼしたるなむ、いと心憂き」など、こしらへ聞え給ふ。

17 朱雀院の、「いまは、むげに世近くなりぬる心ちして、物、心細きを。『さらに、この世のこと、かへりみじ』とは、思ひ捨つれど、たいめんなむ、いま一度あらましを。もし、うらみ残りもこそすれ。ことごとくしきさまならで、わたり給ふべく」きこえ給ひければ、

18 柏「いとことわりなれど、世にためしなき事にも侍らぬを。めづらかに、情なき御心ばへならば、いと心憂くて、なか／＼、ひたぶるなる心もこそ、つき侍れ。『あはれ』とだに、のたまはせば、それをうけたまはりて、まかでなん」と、よろづに聞え給ふ。若菜下 三 373

19 この、たかうなの疊子に、なにとぞ知らず立ちよりて、いとあわたゞしう、取りちらして、くひかなぐりなどし給へば、源「あな、らうが、はしや。いと、不便なり。かれ、取りかくせ。『食物に目とどめたまふ』と、物いひさがなき女房もこそ、言ひなせ」とて、わらひ給ふ。

20 さるは、おり立ちて、人のやうにも、わび給はざりしかど、人ざまの、さすがに、心苦しう見ゆるなり。薫「うち出で過ぐすこともこそ

侍れ。あな、かしこ」とて、立つ程に、冷泉「こなたに」と、めし出づれば、はしたなき心地すれど、まゐり給ふ。 竹河 四 283

21 こゝもとに、几帳を添へ立てたる、「あな口惜し」と思ひて、ひき帰るをりしも、風の、簾垂を、いたう吹きあぐべかめれば、女房「あら、は、にもこそあれ。その御几帳、おし出で、こそと」、いふ人あり。

22 又、ゐざり出で、大君「かの障子は、あら、は、にもこそあれ」と、見おこせ給へる用意、うち解けたらぬさまして、「よしあらむ」と、おぼゆ。

23 心の中には、「かく、慰め難き形見にも、げに、さてこそ、かやうにも、あつかひ聞ゆべかりけれ」と、悔しきこと、やう／＼まさりゆけど、今は、かひなきもの故、「常に、かうの思はゞ、あるまじき心もこそ、出でくれ。誰がためも、あぢきなく、をこがましからん」と、おもひ離る。

24 匂「なか、むげに、さし放ちては、いだしすゑ給へる。……我（が）ためは、「をこがましきこともや」と、思ゆれど、さすがに、むげに多からむは、罪もこそ得れ。ちかやかにて、むかし物語も、うち語らひ給へかし」など、聞え給ふものから、

25 中君「いと、浅ましき御事かな。人もこそ、自らほのかにも漏り聞き侍れ」などは、のたまへど、

26 弁尼「人渡すことも、侍らぬに、きゝに、き事もこそ、出でまうで来れ」と、苦しげに思ひたれど、

27 右近、「いかにせむ、『殿なん、おはする』と言ひたらむに、京に、さばかりの人のおはしおはせず、おのづから聞き通ひて、隠れなき事もこそあれ」と思ひて、この人々にも、殊に言ひあはせず、返事書く。

28 母「かしこに、わづらひ侍る人も、おぼつかなし」とて、帰るを、いと、物思はしく、よろづ心細ければ、「又、あひ見でもこそ、ともかくもなれ」と思へば、浮舟「心地のあしく侍るにも、見たてまつらぬが、いと、おぼつかなく思え侍るを。しばしも参り来まほしくこ

そ」と、したふ。

浮舟 五

251

29 「……例の、『安からず、物思はせん』と、するにやあらん」と、かつは静心なくて、守り立ちたる程に、こなたの対の北面に、すみける下藤女房の、この御障子は、とみの事にて、あけながら、おりにけるを、思ひいで、「人もこそ見つけて、騒がるれ」と思ひければ、惑ひ入る。

蜻蛉 五

315

30 僧都も、「かの人、『世にあるものとも、知られじ』と、よくも知らぬ、敵だちたる人も、あるやうにおもむけて、隠し忍び侍るを、事のさまの、怪しければ、「隠し侍るなり」と、なま隠す気色なれば、人にも語らず。宮は、明石中宮「それにもこそあれ。大將に、きかせばや」と、この人にぞ、の給はすれど、

手習 五

397

これらの「もこそ」を受ける結語は、「こそ」の場合と同じで、それぞれ、順に「すれ」「見つくれ」「おほせ」「（見たてまつり咎む）れ」「すれ」「あれ」「耳とむれ」「あれ」「すれ」「（つき）侍れ」「言ひなせ」「侍れ」「あれ」「あれ」「出で来れ」「得れ」「（漏り聞き）侍れ」「出でまうで来れ」「あれ」「なれ」「（騒が）るれ」「あれ」というように、動詞（補助動詞・助動詞を含む）の連体形そのままであつて、推量の助動詞「め」などを添えることはない。これは、「もぞ」の場合と同じように、「もこそ」に既に慣用語として、予測・仮想の意があるために、これらを添える必要がないからである。但し次のように、「む」を添える「もこそ」もないわけではない。すなわち

31 時方「なやませ給ふ御誓きに、さま／＼の御慎みども、侍るめれど、忌み敢へさせ給ふまじき御気色になん。また、かく深く御契りにては、籠らせ給ひてもこそ、おはしまさめ。残りの日、いくばくならず。猶、一所、参り給へ」と、責むれば、

蜻蛉 五

298

32 「おりたちて、あながちなる、御もてなしに、女は、さもこそ、負けたてまつらめ。わが、さも、口惜しう、このゆかりには、ねたく、心憂くのみあるかな。いかで……寝覚めがちに、つれ／＼なるを、少

しは、好きも習はばや」と思ふに、今は、猶、つきなし。

蜻蛉 五

331

では、両例ともに「もこそ」の結語として、推量の助動詞「む」の已然形「め」が用いてある。31は、「勾宮は喪に引籠りなされて、お出かけなさぬ方がよい」という意、32は、「親しく手を下だして、無理押しに口説く勾宮の御態度の故に、女は無理押しな態度にお負け申しあげるであらう」の意であつて、「服喪していらいっしやるような事があると困る」とか、「お負け申しあげると困る」とかいうような意味はない。つまりこれらの場合は、不安・困却等の慣用語法にある特別の意味のない、普通の係結関係に過ぎない。

係助詞の「もこそ」で文を中止し、下に伴うべき結語を省略した用語例は、かなり多い。

33 かゝる折にも、「あるまじき恥もこそ」と心づかひして、御子をばとどめたてまつりて、忍びてぞ出で給ふ。 桐壺 一 30

34 中将、わりなくゆかしがれば、源「さりぬべき、少しは見せん。かたはなるべきもこそ」と、許し給はねば、 帚木 一 56

35 「いかにぞ。を、こがましき事もこそ」と思すに、いとつゝ、ましけれど、 空蟬 一 114

36 命婦「曇りがちに侍るめり。客人の、「来ん」と侍りつる。いと、ひ顔にもこそ。いま、心のどかにを。御格子参らん」とて、いたうもそゝのかさで、かへりたれば、 末摘花 一 239

37 源「逢ふ事の難きを今日にかざらずばいま幾世をかなげきつゝ経ん御、ほだしにもこそ」と、きこえ給へば、さすがに、うち嘆き給ひて 賢木 一 387

38 年頃は、たゞ、物の聞えなどのつゝましきに、「すこし情ある気色みせば、それにつけて、人の咎め出づることこそ」とのみ、ひとへに思し忍びつゝ、あはれをも、おほく御覧じ過ぐし、すく／＼しう、もてなし給ひしを、 帯標 二 33

39 女君には、言にあらはして、をさ／＼きこえ給はぬを、「聞き合はせ給ふ事もこそ」とおぼして、
落標 二 110

40 年を経て、思ひわたりけることの、……あはれなれど、「いと、かく、さやかに書くべしや。あたらし人の、文をこそ思ひやりなく書きけれ。『落ち、散る、こともこそ』と、思ひしかば、昔、かやうにこまかなるべき折節にも、事そぎつゝこそ、書きまぎらはししか。人の、ふかき用意は、難きわざなりけり」と、かの人の心をさへ、見おとし給ひつ。
若菜下 三 394

41 柏「いま更に、この御ことよ、かけても聞えじ。「この世は、かうはかなくて過ぎぬるを、ながき世の、ほだしにもこそ」と思ふなん、いといとほしき。……いぶせくもあるかな」など、……柏 木 四 16

42 七日／＼の御（誦）経などを、人の、きこえ驚かすにも、致仕大「我に、な聞かせそ。かく、「いみじ」と思ひ惑ふ。中／＼、道さま、げたにもこそ」とて、亡きやうに、おぼし惚れたり。柏 木 四 42

43 弁「小侍従と弁を放ちて、また、知る人侍らじ。……かく、朝夕の消えを知らぬ身の、うち捨て侍りなば、「落ち、散る、やうもこそ」とい、うしろめたく、思ひ給ふれど。……さらに、これは、この世のことにも侍らじ」と、泣く／＼、こまかに、生まれ給ひけるほどのことも、よく思えつゝ、聞ゆ。橋 姫 四 332

44 ほど近くなるまゝに、「花の木どもの気色ばむも、残りゆかしく、峯の霞の立つを、見捨てん事も、おのが常世にてだにあらぬ旅寝にて、いかにしたなく、人笑はれなる事もこそ」など、よろづにつゝましく、心一つに、思ひ明かし暮らし給ふ。早 蕨 五 16

45 中君「あはれなる御願ひに、又、うたて、御手洗川近き心地する人形こそ、思ひやりいとほしう侍れ。「黄金求むる、絵師もこそ」など、後め、たうぞ侍るや」と、のたまへば、宿 木 五 90

46 女君、「例の、むつかしき事もこそ」と苦し、思せど、とり隠さむやは。宿 木 五 102

47 すゞろなる嘆きの、うち忘れて、しつるも、「『怪し』と、思ひ、寄る人、もこそ」と、まぎらはしに、さし出でたる和琴を、たゞ、さなが

ら、かき鳴らし給ふ。

宿 木 五 333

48 僧都「親の死にかへるをば、さしおきて、もてあつかひ、嘆きてなん侍りし。……現しき、事の様にもあるを、世語にも、し侍りぬべかりしかど、「聞えありて、煩はし、かるべき事にもこそ」と、このお人どもの、とかく申して、この月頃、音なくて、侍りつるになむ」と申し給へば、夢浮橋 五 421

これらは、37・41・42・48の「もこそ」の下に、四段活用 of 動詞「なる」の已然形「なれ」が略されている外は、すべてラ行変格 of 動詞「あり」（補助動詞）の已然形「あれ」が省かれている用語例である。

さて、振り出しに戻って、右の慣用語法は、いずれもある事を予測又は仮想し、これに伴う不安、懸念等の念を表わしている。「もぞ」の前後には、「おろそかなり」「からし」「口がたむ」「罪得」「人に聞かすな」「人目たつ」「煩はし」等、あまり芳しくないことばがあった。それと同じように、「もこそ」の前後にも、芳しくない語、

浅まし あぢきなし あなかしこ あひ見ず（2） あまりやつす あやし（2） あらはなり あるまじき心 あるまじき恥 いとひ顔 言ひなす うしろめたし うち出で過ぐす うらみ残る 御几帳おし出づ 隠れなき事 かたほなり 烏など見つ 聞き合はす 黄金求むる絵師 心づかひす 罪得 とかく申す はしたなし ひたぶるなる心つく 人見つ 人咎め出づ 人笑はれなる事 不便なり ほだし まぎはし 道さまたげ 見咎む（2） 耳と々む むつかしき事 物言ひさがなし 物言ひたゞならず 漏り聞く 煩はし をこがまし（2） などが用いられているのも、このことを示している。

ところが、形は同じ「もこそ」でも、この慣用語法の不安・懸念等の意味のない用語例がごく稀にある。本居宣長も「詞瓊綸五之卷」、「こそ」の条に、「又同じことながらあやぶむ意のなきは」という見出しで、次の四首の和歌を挙げている。

後 九 人のうへのことゝしいへばしらぬかな君も恋するをり「もこ

そ」あれ

拾 一 身にかへてあやなく花を惜むかないければ後の春「もこそ」

あれ

新 二 山ざとの庭よりほかの道もがな花ちりぬやと人「もこそ」と

へ

後拾二 思ひし人「もこそ」あれ＝あぢきなくつれなき恋に身をや

かへてん

又、「又たゞ常のこその上にもの添ひたるは」という見出しで、

古 三 うつゝにはさも「こそ」あらめ＝夢にさへ人めをもると見る

がわびしさ

又、右のほかに五首の和歌を挙げ、そのあとに、「これらは行末をおしはかる意にはあらず。上なるもこそとは異也。此格は大かたは聞よからぬ物なり。…」と述べている。源氏物語でも、

49 「『あはれ』とて、いひやるべき方なきことなり。なぐさめ給は

ん、御さま、露ばかり、嬉しと思ふべき気色もこそなけれ。げに、かの夕暮の顯証なりけんに、いとど、かう、あやにくなる心は、添ひたるならん」と、ことわりに思ひて、

竹 河 四 272

この「もこそ」には、慣用語法の不安等の意はない。すなわち、大君入内の事が決定して落胆した藏人少将が、大君に代わって、少将の気休めなさうという中君の御様子を、少しも嬉しいと思ひそうな様子がない。それどころか却って、大君と中君の容姿が、碁を打っていた夕暮の、はっきりしていたかも知れなかったために、無理な心が一段と加わったのだらうと、それをもっともな事だと中将御許が思う場面である。これは、「もぞ」の項で述べたように、普通の係結関係である。49は、「もこそ」に形

容詞がついた例であるが、「校異源氏物語大成」によれば、青表紙本は全部「けしきもなければ」、河内本も異同なし、別本に三本だけが「けしきも」が「けしきにも」であって、いずれも「もこそ」には関係がないことになる。

50 「いまさらに、人の心癖もこそ」とおぼしなから、物の、苦しうお

ぼされし時、「さてもや」と、おぼし寄り給ひしことなれば、なほ、

おぼしも絶えず。

真木柱 三 120

大系本には、「もこそ」の下に「現はさめ」と傍注を補い、頭注に「自分（人）の心の癖をも現わそうか、どうも現わされない。」と解釈している。結語に「め」が来るなら、普通の係結関係である。この例にも、慣用語法としての特別の意味はない。

51 「げに、浅ましう、月日もこそあれ、中／＼この有様をはるかに見

奉るも、身の程口惜しうおぼゆ。……かゝりける御ひゞきをも知らで、立ち出でつらん」など、思ひつゞくるに、

曙 標 二 119

これは、明石の上の思惟内容で、「今日に限らず、外にいく日も日もあるのに、なまなか今日参詣して、源氏の君の御様子を遠くからお見申しあげるにつけても、源氏に近づく事もできない自分の身分の低さが、却って残念に思わずにはいられない」と嘆いているところである。この「もこそ」は、強意の働きだけで、「も・こそ」と二単語で、いわゆる反転的意味の普通の係結関係であり、慣用語法がもつ特殊の意味はない。

前述の「しもぞ」の場合と同様に、「もこそ」の上に「し」がつくと、やはり普通の係結関係で、やはり慣用語法の特長な意味はなくなる。

52 女房「限（り）なき、御心の程をば、今しもこそ、見たてまつり、知らせ給ふさまをも、見えたてまつらせ給ふべけれ」などきこゆれ

右は、「……………いかにも今がまあ、薫にお見られ申しあげるべき時である」と言つて、「今」を強調する女房のことばであつて、不安等の意味はない。「詞瓊綸卷五」に、

○しもこそ 是はしもとこそと重なりたる物にして。〔もこその上にしの添たるにはあらず〕もぞの意とは異也。〔しもぞの格に同じ。三の卷その部のしもぞの条と考へ合すべし〕さてしもといふに。軽く却ての意をふくめり。さればこそその下に、かへりてといふ言を加へて見れば。歌の意明らかなり。

と説いて、八首の和歌を挙げてゐる。「しもこそ」は、「事しもあれ」「人しもあれ」などの形で、慣用語法式に用いられてゐる。

事しもこそあれ・人しもこそあれ

53 「森の下草老（い）ぬれば」と書きすさびたるを、 ことしもこそあれ、うたての心ばへや」と、笑まれながら、 紅葉賀 一 291

54 女三「谷には春も」と、何心なく、きこえ給ふを、 事しもこそあれ。心憂くも」と、おぼさるゝにつけても、 幻 四 204

55 「事しもこそあれ。うたて、あやし」と、思せば、 物もの給はず。 総角 四 444

56 薫「衣かたしき、今宵もや」と、うち誦じ給へるも、……いと、物 深げなり。事しもこそあれ、宮は、寝たるやうにて、 御心騒ぐ。 浮舟 五 234

57 いと忍びて、障子貼らすべきことなど、人しもこそあれ、この内記 給ひつたりければ、 浮舟 五 246

53・54は、光源氏の、55は、女一宮の、それぞれの思惟内容、56・57は、草子地の用例である。「事しもこそあれ」は、「外に歌もあるうに、選りに選つて、こんないやな歌を」の意である。「人しもこそあれ」は、「外に適当な人がいくらもいるのに、選りに選つて、この人を」の意で、いづれも、あまり芳しくない歌や人に対していう慣用語である。「しも」がなくて、「……こそあれ」でも、この意味の場合がある。例へば、

58 「事こそあれ、あやしくも、いひつるかな」とおぼす。

東 屋 五 197

も、「吟誦する句も、外にいくらもあるのに、自分ながら、妙にまあ、こんな縁起の悪い『楚王の台の上の、夜の琴の声』なんて句を吟じてしまつて」と、薫が反省している場面である。これを強めると、「事しもこそあれ」になる。「しも」と「こそ」が重なつて「しもこそ」になつたもので、「もこそ」の上に「し」が添つた「し・もこそ」ではないと説く、本居宣長の主張の論拠になる。

さもこそは

同じように「もこそ」のついた語法関係の慣用語句に「さもこそは」がある。既に木之下一雄氏が、「あゆひ抄」八もこそ∨の条を引用して説明しておられるように、上文の事実を一応譲歩的に認めて、それを抑えて、下文の事実の程度の甚だしさに反撥する言ひ方に用いてゐる。源氏物語でも、次のような用例がある。

59 大宮「人の心こそ、憂きものはあれ。とかく、をさなき心どもにも、われに隔てゝ、うとましかりける事よ。又、さもこそはあらめ、大臣の、ものゝ心を深く知り給ひながら、我を怨じて、かく、ゐてわ

たし給ふ事。かしこにて、これよりうしろやすき事もあらじ」と、うち泣きつゝのたまふ。 乙 女 二 301

60 中将さもこそはよるべの水に水草めめ今日のかざしよ名さへ忘るる 幻 四 208
と、はぢらひて聞ゆ。

61 大君「われも、世にながらへば、……さもこそは、憂き身どもにて、さるべき人にも、おくれたてまつらめ。『やうの者』と、人笑はれなることを添ふる有様にて、なき影をさへ悩ましたてまつらんが、いみじさ。……いかで亡くなりなん」と、おぼし沈むに、 総 角 四 441

59 は、「いくら子供達が私を疎外して内証事などをするからとて、物の道理を知っている内大臣までが、私を怨んで、雲井雁を自邸に連れて行ってしまうことはないじゃないか。……」と、大宮が泣き泣き言われることばである。「校異源氏物語」の本文では、「さもこそ」とあって、「は」がない。校異は、青表紙肖柏本と、別本保坂本と二本だけが「さもこそは」となっている。

60 は、「いくら私への情愛が無くなって久しいからとて、逢うという言葉葉までお忘れになることはないじゃありませんか」と、中将が源氏に詠みかけた歌である。

61 は、「不運な私どもなので、然るべき人―親や夫―にも死に後れ申しあげるかも知れない。だからといって、私までが、中君と同じように、夫に捨てられて、世間の物笑いになり、親の魂までお苦しみ申しあげることは、つらいことだ。……」と、大君が思い沈みなさるところである。

さきに、32で例に挙げた「さもこそ……め」（蜻蛉 五331）の用例と意味が同じである。この「さもこそ」に係助詞「は」のついたものが、「さもこそは」である。本居宣長も、「○さもこそ」下にはの添ひたるも同じ⁽¹⁸⁾と述べ、「さもこそ」と「さもこそは」を同一に扱い、十二首の和歌の後に、

これらは上のさこその中の「いかにと心得る格と同じ意にて。」「さも

こそはあひ見んことのかたからめは。「いかに逢見んことのかたければとても心得て聞ゆる也。その外の歌どもも。これになずらへて心得べし。⁽¹⁹⁾

と説いている。

「源氏物語大成」の索引によれば、

「もこそ」の各種33、「もこそ・と」9 「もこそ・とて」1 「もこそのみ」1 「もこそ・など」2 「もこそは」2 合計48
の「もこそ」が示されている。これらは、上下の接続を一々細かに検討すれば、もっと組織的な操作ができたであろうが、今回は、この索引には依らず、「大系」の「源氏物語」五冊の本から、目につくものを順に拾って行つて、それらを意味の上から検討して見た。見落しもある。

さるは

源氏物語の慣用語法の最たる「さるは」は、「源氏物語大成」の索引によれば、59例がある。「校源氏物語用語索引」によれば58例ある。この語については、島津久基・吉沢義則・時枝誠記・福田良輔・石川徹諸氏の説を綜合した説があるので、詳しくはふれないでおく。ただ、本居宣長の「玉小櫛」のように、「上を受けて『さあるは』といふことにて、俗言に『それは』といふに同じ」⁽²¹⁾だけでは説明しきれないところに、この語の慣用語法たる所以がある。もちろん、「さるは」は、「さあるは」の略だろうから「そうあるのは」が原義ではあるが、文脈によって、「その実」「そうではあるがしかし」「そうはいうものの」「それはそれで」となるところが慣用語法なのである。大系本から私が急いで拾った四五例のうちでは、

①さるは、「かぎりなり、……その（目とまる）故は、……

若 紫 一 185

②さるは、いみじき姿に、……そんなにまあ、…… 紅葉賀 一 272

- ③さるは、いといたう、……↓そうであるのは、…… 朝 顔 二 253
 △さるは、かの、世とくもに恋ひ泣く右近なりけり↓それで（互に物も
 言わず気がねして居るので）はあるものの、 玉 鬘 二 344
 ④さるは、いと、年頃の心のしるしも、↓そうである（今日に延ばして
 も、参上をお許しなされた）事が、全く。 宿 木 五 71
 ⑤さるは、をこなり。↓それで（落ちつけようもなく悲嘆して）あるの
 は、馬鹿らしい。 蜻 蛉 五 294
 294

の五例だけが、「そうあるのは」式の原義に近い解を下だしてある。

ところが、大系本の頭注で「そうではあるものの」式の逆接法に解してある△印の玉鬘の用例について、故池田亀鑑博士は、

この「さるは」は、普通の用法と異り、「それは」の意。諸系統の本
 文に異文がないから、オリジナルなものを見てよい。
 と説明しておられる。

このように、同じ個所が人によって異なる解釈を生むところに、この語
 にまだ究明しなければならない点があるのだと思う。

お ぼ ろ げ

「おぼろげなり」は、「凡そである」「はっきりしない」などの意であ
 るけれども、平安時代の作品では、「おぼろげならず」の意に用いられる
 例がある。現代用語で、「とんだ事をした」と「飛んでも、ない事をしてく
 れた」とが同じように用いられるようなものである。肯定形を否定形と同
 じに用いるのであるから、普通の文法や論理的な意味からは説明できない
 表現ということで、慣用語法になる。源氏物語にも、この現象がある。

- 62 おぼろげに思ひ忍びたる御後見とは、思し知らせ給はんや。

薄 雲 二 241

- 63 「……これよりあながちなる心は、よも、見せたてまつらじ。おぼ

ろげに忍ぶるに、あまる程を、なぐさむるぞや」とて、

胡 蝶 二 412

- 64 おぼろげの、昔の世の、あだならぬ人は、たがふ節くもあれど、
 一人く、つみなき時には、おのづから、もてなす例ども、あるべか
 めり。 若 菜 上 三 298

- 65 おぼろげに染めたるわが心から、あさくも思ひなされず。

若 菜 下 三 319

右はいずれも「おぼろげならず」又は「おぼげならざる」の意に用いら
 れている。同じような現象が、「怪しかり」が「けしからず」の場合にもあ
 り、二つが同じ意に用いられることがある。一例を示せば、源氏の藤壺宮
 に対する恋慕を、「けしからぬ心」(葵³¹⁸) といっているのは、「怪しき
 心」の意である。

注

- (1) 同書 四一六頁 (2) 同書 二二九頁 (3) 同書 三二八頁
 (4) 同書 二九八頁 (5) 同書 一八一二頁 (6) 金沢庄三郎・
 折口信夫編「国文学論究 昭和九年七月」八五―九三頁(7) 湯沢幸吉郎
 「文語文法詳説」五六一頁 (8) 岩井良雄「日本語法史 奈良・平安時
 代編」五一―五七頁 (9) 「増補本居宣長全集」第九 九八頁
 (10) 同書一六五頁(11) 「日本語法史」五一八頁参照 (12) 「増補本
 居宣長全集」第九 九九頁(13) 同書 一六五―一六六頁 (14) 「校
 異源氏物語」巻四 一四八頁(15) 「増補本居宣長全集」第九 一六
 六頁 (16) 木之下正雄「平安女流文学のことば」二三七―二三八
 頁 (17) 「校異源氏物語」巻二 六九〇頁(18) 「増補本居宣長全集」
 巻九 一六八頁(19) 同上 一六九頁 (20) 「平安女流文学のことば」
 二三九―二四二頁 (21) 「増補本居宣長全集」第七 六八六頁(23)
 「新講源氏物語」上巻 三二九頁頭注

(昭和四五、一二、二四)